

---

# MOLOCH ~ ボランティア編 ~

遠堂 沙弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOLLOCH〜ボランティア編〜

### 【Nコード】

N5227G

### 【作者名】

遠堂 沙弥

### 【あらすじ】

魔物保護の旅を続ける破戒僧ユーリと、愉快的仲間達が繰り広げる冒険ふぁんたじー。\*\*\*不定期更新です\*\*\*

## 第1章 「金髪エルフと精霊石」(前書き)

これは私が高校生の時に考案して発表する機会のなかった長編小説「MOLLOCH」<sup>モレク</sup>の前座的なお話です。本編とは違ってギャグ中心です。この前座なくしてユーリの性格破綻を語りつくせないのも、どうぞ読んでみてください。そして感想や評価してもらえると幸いです。よろしくお願いいたします。

## 第1章 「金髪エルフと精霊石」

ここはセアシエル大陸……。

色々な種族が懸命に今を生きている、そんな時代のそんな場所。

普通のRPG的な世界ならモンスターは人間の宿敵……のはずなのだが、この物語はそんな一般的なものじゃない。

確かに数年前位なら、それがごく自然で当たり前の事だったのだが、現在では状況が一変している……。

なんと、モンスターにも人間と同じ「心」が芽生え始めたのだ！  
そんな状況に気付く者……、知ったとしても今までと変わらない態度を取る者……様々いるが、中でも代表的な活動をしている人間がいた……。

この物語はそんな人間たちとモンスターとの心の触れ合いを描いた感動ストーリーなのだ……。 (一部……、いや、八割がた欺瞞あり……)

セアシエル大陸の西部に位置するコロレオネという、ごく普通の町……はずれ。

普段ではあまり人が入り込まない様な所から、誰かの叫び声が目撃される。

「待てえーっ、モンスターめー!!」

……どうやら、モンスターを追うハンターか何かのようだ。

しかし、何かが妙である。

叫び声の正体は、十三歳位の少年に、まだ年端もいかぬ少女が一人。

「はあ、はあ……、ちつきしょう!! やっぱ眠ってる間にやられちまったみたいだ……、全然気配すらない!」

悔しがりながら少年がぼやく。

「ひっく、えぐ……。ぢゃあ、もうみつかないの!?!」

「なっ、泣くなよ……。しょうがないじゃないか。もう姿もないんだから……!?!」

「うええええええっ!!!」

「ああもう!! とりあえず町に帰ろう!! もしかしたら父ちゃんの手伝ってくれるかもしれない……(たぶん)」

そう言うと、二人は仕方がないという面持ちで町へと帰っていった。

コロレオネの町……。

農業が一般的に行われているこの町では、訪れる旅人も少ないせいか宿屋が一軒しかない。

町を代表する遺跡や珍しいモンスターや、伝説に残るような高価なアイテムも存在しない町に訪れる人は少ない。

言うなれば、静かに人生を生きたいという人にはうってつけの、のどかな町……という所である。

しかし、そんな町に珍しく一人の女僧侶が足を踏み入れた。

きよときよとと辺りを見渡し、今日泊まる宿を探す。

「このご時世に、こんな平和な町があったなんて……あたしもこん

な町で生まれたかったなあ！」

少し大きな場所、おそらくこの町の中心の広場か何かであろう所へやって来た時、子供の叫びが辺りを響かせる。

「本当に本当なんだもん！！ おばあちゃんの形見の精霊石を盗られちゃったんだもん！！」

中央の噴水の端で、親子らしき人物が何か言い争っている（……つて言ったらちよつと大袈裟かな）

「だから！ 一体どんな人に精霊石を盗られちゃったって言うの！？」

母親らしき人物の問いかけに、先程の十三歳の少年と幼い少女は口を揃えてこう言った。

「ウサギみたいに耳の長い人！」

二人の証言をリアルに想像する母親は、……想像力貧困であった。

「そんな人間が、この辺りにいるわけないでしょ！！ 今日はもちろんいいから、手洗って夕飯を食べなさい！！」

そう言い残すと、母親らしき人物はスタスタと（おそらく家に）行ってしまった。

その光景を思い切り目の当たりにした黒髪の僧侶風の少女は、二人に話しかけた。

「ねえ、その精霊石……このお姉ちゃんが取り返してきてあげよう

か!？」

含みのある邪悪な笑みが、二人の幼い兄妹に忍び寄る。

冒頭文にあつた人気のない森……。

二人の子供に精霊石を取り返す……などと大見栄切った僧侶風の少女が、一人歩いて行く。

つか、大見栄なんかじゃないっての!! 全く……、どうやら自己紹介が必要のようね……、いいわ。名乗ってあげる!!

あたしの名前はユーリ、ユーリ・エルロンよ。モンスターの救命・介護するボランティア活動をしている、この世界でも第一人者の『モンスターズ・ボランティア』とは、このあたしのことなのよっ!!

はいはい……。

というわけで、どうやらこのユーリには精霊石を奪った犯人に何か心当たりがあるようだが……?

何シカトぶっこいてんのよ、今さり気にスルーしたでしょ……!?

……まあ、いいわ。確かに、あの二人の証言に嘘はないわ。

あの母親は、コロレオネの町が見向きされない位目立たない町だつてことに理解があつたから可能性を否定してただけ……、「ウサギのように耳の長い人」ってゆうのは、おそらくエルフ関係の者……。

それが普通のエルフか、とても邪悪なダークエルフかどっちかはまだわかんないけど……恐らく前者の方だと思う。

あの子たちの話の中には（あたしが話しかけた後、詳しく事情を聞いたから知ってるのよ!）、眠ってる間に盗まれたと言ってたわもしこれがダークエルフの仕業ならば、わざわざ眠りの呪文を使わ

なくても二人を殺して奪えば済むもの……（過激……？）でも眠りの呪文を使っただってことは、傷つける気なんてなかったっていうことになる。つまり、余計な争い事には首を突っ込まない前者のエルフの仕業になるわけね、分かった！？

それがわかったとしても、そのエルフをどうやって見つけるか……だけど？

ふっ、エルフが精霊石を奪っただってことは何か目的があるのよ。あたしの推測では、精霊石を何かの理由で必要としているか、ただのコレクターか……。

どちらにしてもしばらくは精霊石を奪うことを繰り返すでしょうね……。

となれば、こちらも精霊石をダシにしておびき出せばいいのよ。

でも、精霊石を1個だけ必要としていたら（この時点でコレクター説否定前提）もう奪おうとはしないかも……？

ふっふっふっ……、こういう問題には、回りの状況や第三者の態度を注意深く観察する事も必要になるのよ。

あの母親は精霊石が奪われたというのに（ましてやおばあちゃんの形見）、すぐ諦めさせたでしょ？

あの態度からして、盗られたっていう精霊石……多分二セモノね。この世界で精霊石っていったら、そりゃもう高価なんてモンじゃないわ。

精霊石は、身につける者の生命を守護する役割を第一として効力を発揮する代物。

命を何者かに狙われている人物や、常に危険と隣り合わせの仕事をしている者達にとっては、喉から手が出る程の価値があるのよ。そんな物をすぐに諦めさせると思う？

でもでも、実は子供達には心配かけないようにと、後で父親が誰かが取り返しに行くという事は？ …… 必死で。

多分、それも否定ね。さっきも言ったように、この町は平凡過ぎる程平凡な町……。

つまり、この町の人全員が他所から誰かが移り住む……なんて考えないわ。

来るとしたら、平和な余生を過ごす為に訪れる年金暮らしの普通の人間位……、あんな突飛な特徴をした人物がわざわざこの町にいる……なんて思ったりもしないでしょうね。

ようするに、そんな突飛な特徴をした人物が出るのなら、その噂を聞きつけて観光客の一人位増えてもいいはず。

しかし、そんな気配もしないのならイコール……そんな突飛な特徴の人物なんて始めからいない……。

子供達が精霊石を失くした言い逃れの為の嘘……とでも母親は思ったのよ。

なるほど……、あの母親はこの町周辺に人間以外の存在がいてるなんて有り得ない事だと分かっていたからこそ、あの一瞬で「ウサギのように耳の長い人」の存在までも否定したんですねえ……。  
わかりました……、それではどうぞ物語に戻ってください。

そつちも状況説明、よろしくね！！

話戻って森の中を突き進むユーリは、足を止めた。

……何かいる。そしてユーリは、子供達の話の思い出した。

エルフは、眠りの魔法を使って精霊石を奪う……。

恐らくこの気配はエルフのものと推定して、すかさず魔法反射の

呪文の詠唱をする。

その瞬間、どこからともなく呪文の名を叫んだ者が攻撃してきた！

「スリープ！！」

それに反応したユーリは、素早く呪文の名を叫ぶ！！

「アンチマジック！！」

ユーリが放った魔法は、寸分の狂いもなく相手の魔法を跳ね返した。

「ぐわっ！！」

ザザザザザザザッ。

自分が放った魔法がまさか跳ね返されるとは露とも思わず、まともに食らった為、短い悲鳴を上げると木の上に隠れていたのか……、真下へと落ちて行った。

長い金色の髪……、その髪で見え隠れする長く尖った耳……、真正銘エルフに間違いはない。

ユーリの勘は当たった……と同時に、なぜか少し動揺していた。エルフはそこらのモンスターとは違って、剣技は上位クラス……魔法もそこそこ使えるというかなりの実力を持つ。そんなエルフ相手に、女の……しかもただの僧侶であるユーリでは歯が立たない。更に付け加えるとエルフの魔法防御力はかなりあって、補助魔法（眠りや毒など）はあまり効果がないのだ！

勿論力で適うわけではないし……、ユーリは正体を見破っても倒す方法にまでは考えがなかったようだ。

しかしあの子供たちの精霊石が偽物とはいえ「取り返す」と約束したからには、何とかして取り返さなければならぬ！！

エルフが商談の通じる相手かどうかはわからないが、とりあえず話し合いを持ちかけようとした。

「ねえ、ちょっと話を聞いてくれないかしら！？ 悪いようにはしないわ、約束する……」

ユーリは両手を上に挙げて降参の合図を示した。エルフは少しためらったが、ユーリの態度で覚悟を決めたのか、話し合いに応じた。

「話とは、一体何の話だ！？」

話し合いに応じてくれたという安心感で、ユーリは思わず微笑む。

「まずは自己紹介ね、あたしの名前はユーリ。あてのない旅をしている一介の破戒僧よ……。ここへはたまたま訪れただけで……：危害なんか加える気ないわ」

……大ウソだった。

「……あなたの名前も教えてくれる？」

ユーリをジッと観察して……、それから答える。

「……フィレミアム、他の奴らはフィルと呼ぶ」

「そう、フィルね……。早速だけど、あたしがついさっき知り合った友達がエルフらしき人物に精霊石を奪われたって言ってたんだけど……。何か心当たりはないかしら！？ 何か知ってたら教えてほ

しいんだけど……」

ユーリの回りくどい問いかけに感づいたのか、フィルは鼻でフンツと笑った。

「心当たり!? お前は犯人が俺だと知っててこの森に入り込んだんじゃないのか?」

小さな溜息をもらすと、話を続けるユーリ。

「真犯人にしか今の質問の回りくどさには気付かない……、やっぱりあんたが精霊石泥棒なのね。なぜそんなことを?」

フィルは少し間を置いてから話を続ける。

「まあ、俺のしたことは確かに泥棒だ……、それは認めよう。だが、俺が精霊石を集める理由を話さなければならぬのはなぜだ? お前達人間には関係のないことだろう」

「関係なくはないでしょー、こちらら被害者なんですからね。それ相応の理由がないと、ハイそうですかかってわけにはいかないのよ。それにおばーさんの形見だっという話だしね……」

すかさずフィルが嘲笑する。

「はっ、あれが形見だと!? あんな偽物を後生大事に形見にするなんて……、全くもって迷惑なのはこっちの方さ! お陰でとんだ無駄足だ……、こんなもの……ノシつけて返してやるよ!」

カチン……。

フィルの暴言に激怒したのか、ユーリはずんずんとフィルのいる方向へと向かって歩き出した……。

バシィツツ!!

ユーリの平手打ちが、鮮やかな音を立てて響き渡る……。

「なっ、何を……っ!!」

「あんたらエルフの間じゃどうだか知らないけどねえ、あたし達人の間では言っていることと悪いことってゆーのがあるのよ!! あんたに何の目的があるのかは、あんたが話してくんないから知らないけどね。そりゃあ、あんたにとっては迷惑な話かもしれないわ……、でもあの子達にとつたらあれが本物だろーと偽物だろーと……とてもとても大切だったおばーさんの形見の品なのよっ!! あんたは故人の遺した遺品に対して、侮辱する行為をしたのよ!!」

ついさっきまで下手に出ていたユーリが一変して、得意の説教をたれた!!

その態度に腹を立てたフィルは、殴られた頬に手を当てながら反撃に出る。(やめとけ……口で奴には勝てないぞ!?)

「貴様、誰に口をきいているっ!? 俺は死んだ奴にそもそも興味などないんだ、勿論死んだ奴の事をいつまでもウジウジとしてるよ。うな人間を見るのもヘドが出るね!!」

「あーそうね、あたしも同意見だわ。でもそんなエラソーなことはつか言っていると、いざあんたがおっ死んだ時には誰も悲しんではくれないわよ!? 故人を慈しむ心が大事なことだってわからないあんたは、死神よりもタチが悪いわ」

バチバチバチバチバチツ!!

両者の間で火花が散る。

火花が散って数分が経つ頃……、フィルはようやく本来の目的を思い出したのか、急に態度を変えた。

「ハツ……、シエーラ……!!」

「……!?!」

フィルが視線を逸らしたかと思うと、今度はユーリをジッと見つめてきた。

「な……何よ!!」

ユーリはときめいたのではなく、凝視された目つきで見られたのが不快に思ってたようだ。

「お前……、自己紹介で破戒僧といていたが……、僧侶であったことに変わりはないんだろう!?!」

突然、質問されて戸惑いながらも、つい素直に返事をしてしまうユーリ……。

「まあ、僧侶だった事は僧侶だったけど……、それがどうしたってこのよ!?!」

「精霊石もあるし、僧侶もいれば何とかなる……。今までの事は水に流してやるから、ちょっと来てくれ!!」

意外にも素直に従うユーリには考えがあった。どうしたのかはわからないが、ひょっとしたら精霊石を集める目的が明らかになるの

かもしれない……そう踏んだのだ。

このまま黙ってついていけば彼が話さなくとも、自動的に理由が見えてくる。そうゆう企みを考えている間に、目的地に着いたようだ。今まで獣道を歩いてきたが、その先には小さく切り開いた土地と、小さな家が一軒だけ建っていた。

きちんとした道を作らなかつた所を見ると、おそらく誰にも踏み入れてほしくないという考えがあつての事だと思つた。

まさしくここは、身を潜めるにはうってつけの立地条件がそろつていた。

辺りを物見遊山のように眺めているユーリを他所に、フィルは家の方へと走っていく。

「シエーラ！！ 安心しろシエーラ、これで助かるんだ……その苦しみから今すぐ解放してやるからな！！」

ユーリは外にいたからわからなかつたが、どうやら名前からして家の中には女性がいるようだ……。

「おい、さつさと来ないか！」

「はいはい……」

仕方ないという風にユーリは家の中へと足を踏み入れた。

「っ……」

ユーリは自分の目を一瞬疑つた。鼻を突くような異臭が家の中に立ちこめて……、まるで死体の山にでもいるような錯覚を起こしそうな感じにさせる。いや、それよりも……目の前の光景が信じられなかつた。

部屋の隅にたたずむ一人の少女……いや、果たして人であるのかも疑わしい姿をしていた。

まるで高熱でできた火傷のように肌はただれ、膿が身体中をどろどろにし、ところどころにはウジがわいて膿を貪っている。

そんな状態が身体中……、顔にまで至っている。ユーリは瞬間、死体が座っているのだと思った程、その光景は想像を絶するものだった。

「こいつは僧侶の上に、あの精霊石も持っているんだ……だからお前の病気もすぐに治る……！」

(病気……!?!? こんなもの病気なんてものじゃない。一体どうやってたらこんな事に……)

この凄まじい光景を見れば誰だってそう思うだろう。しかもフィリは僧侶……もしくは精霊石の力をもってすれば治ると信じている……。ユーリにとってその誤解がたまらなかった。

こんな状態にまでなってしまうたら……例え大僧正の力を持ってしても治すことはできないだろう。

それよりもユーリは、なぜこんなことになったのかの理由を聞くことにした。

原因がわかれば、治す方法もあるかもしれない……!!

フィリは一刻も早く治してほしい気持ちで一杯だったが、ユーリに何か考えがあるのだと思い、ゆっくりと話し始めた。

「あれは……そう、俺達がまだ放浪しながら傭兵をしていた時のことだった……。そんなに昔の話じゃないさ。人間にとつたら長い年月かもしれないが……エルフにとつちやそれ位の頃だ」

忘れはしない……、あの町の名はサルトという……大きくも小さくもない町だった。俺達は次の仕事を求めて酒場を探した、こういう仕事をする者は町に寄ればまず酒場と相場は決まっているからだ。しかし、この町には割のいい仕事なんてなかった。

「うーん、なかなか簡単なのってないねえ兄さん」

「仕方ないさ。こういう町には俺達みたいな傭兵がゴロゴロしてるからな、いい仕事は早い者勝ちなのさ」

「あるっていったら今この町を騒がせてる奇病の話だけだけど……」

「そういうのには首を突っ込むな、シエーラ。そんな話が一番ヤバイんだ。成功すれば多額のギャラがもらえるが失敗すれば奇病をもらってアウトだからな」

俺はこの町では仕事が見つからないと思い、明日の朝にでも出発するはずだった。

今思えばすぐにでも立ち去るべきだったのだ！！

俺達が宿に部屋をとって、夕食を頼もうとしたその時だ……。

「あんたたち、凄腕の傭兵と見たが……違つかい？どうだ、俺の話に一枚噛んでみないか！？」

その男の話というのは、さっき見た奇病の件だった。

「悪いが、そういう依頼は受けられないようにしているんだ。他を当たってくれないか」

「そんなつ、じゃああんたはこの町がゴーストタウンになつてもいいって言うのか!? この町の奴らはみんな例の奇病に怯えて生活をしている。そんな暮らしにウンザリしている者だつて後を絶たない!」

その男の話によると、奇病を振りまいているのはモンスターの作業らしい。

昔この町を開拓しようとした連中が見かけぬ岩をどかしたのがきっかけでモンスターを解放したそうだ。

岩はモンスターの活動を制御する封印みたいなもので、その封印を解いてしまったためにモンスターが奇病を撒いた。

以前まではモンスターの領土に近づく者のみに奇病を与えたそうだが、今では町全体を襲う気であるらしく、奇病をこれ以上増やさないためには、モンスターを退治するしかないと悟つたのだ。

「今まで多くの傭兵達が挑んだが全て返り討ち、もう後がないんだよ!」でもエルフならそういう抵抗力も人間より優れているし、何よりも強い。だからこの仕事はあんた達でないと無理なんだ!」

「言つたはずだ、そんな依頼受ける気はないと!」

「兄さん!」

「シエーラ、放っておくんだ」

俺は部屋へ戻つた。だが、シエーラには人間を見捨てることばかりできなかったのだ。

「あの……あたしで良ければ、そのモンスターを退治するのに協力できますが」

「本当ですか、ありがとうございます！！　では早速ですみませんが……」

俺は何も知らず、部屋で呑気に眠った。やがて朝になり、シエーラが部屋に戻ってないことに気付いたのは、起きてすぐのことだった。俺はまさかと思った、そして夕べの奴を必死になって探した。

「おいっ、シエーラはどうした！？　お前まさか、あの依頼をシエーラにやらせたのかっ！？　どうなんだ、答えろっっ！！」

「あ……ああ、でもきつと大丈夫だって。あんたの相棒を信じてやれよ。多分今頃はモンスターの首でも落としているところ」

俺は呆れた。こいつと一緒にいてもラチがあかないから、俺はシエーラ自身を探した。そして、シエーラを見つけた時にはすでに昼近くになっていた。

「に……、兄……さん……」

「シ……ッ！！」

俺がもっとしっかりしていれば、目を離さなければ……こんなことにはならなかったのかもしれない。

「結局は……、俺がいけなかったんだ。全て……、何もかも……っ！！」

フィルはひざまずき……、肩を震わせた。

「でもあたしの知っている限りだと、奇病をふりまくモンスターっていうのは……」

「デタラメさ」

「え」

ユーリは驚きの色を隠せなかったが、大体の予想はついていた。

「確かにステータスに異常をきたすモンスターは存在するが、シェーラのような症状を出させるモンスターなどいないって、とある専門家に言われたよ。専門家の話によると、魔法の研究や実験に失敗したらこんな作用を起こすものがあるんだと。しかも人体に異常を与える失敗例には 町の発展の為の合成獣キメラを作る時によく起きるんだそうだ。詳しく問いただしたら奴はこう言った。町の外れに住んでいた魔術師が合成獣キメラを作るのに失敗して、その気体を吸ったらシェーラのような状態になるんだと。その気体には限りがあつて、ある一定以上の人数が吸い込めば自然に消滅するらしい。事態を把握してる町の者が気体を吸うはずがない……となれば、賞金に目が眩んだ傭兵達を誘いだして吸わせれば自然に気体もなくなっていくと考えたんだそうだ。このことが世間に知れ渡れば、間違いなく極刑だ。だから町のごく一部の者だけがこんなバカげた行為を繰り返していた。世間に漏らさず、あたかも気体を吸った者はモンスターの奇病にやられたんだと見せるためにね。気体にやられた者は言葉すら不自由になってしまふ。それも計算に入れてのことだったんだっつっ!!」

フィルの怒りがユーリにも痛い位に伝わってくる。ユーリは不憫

に思えてならなかった。ユーリも仕事上、シエーラと同じようになる可能性だつてあるからだ。

「フィル、これだけは言っておくわ。あたしは医者でも魔術師でも何でも無い……、ただの破戒僧よ。でもあたしの出来る限りのことを……あたしの持てる力全てを使ってシエーラを救ってみるわ。でも期待だけは……しないでちょうだい」

フィルは話し終えて、そしてユーリの言葉を聞いてようやく顔を上げた。たくさん涙を流しながら……。

「頼む。シエーラの苦しみだけでも、取り除いてやってくれ……！」

ユーリはシエーラの状態を見て、最も有効な魔法が何なのかを考えた。これは病気と呼べるものじゃない……となれば、体の治療能力を最大にして膿を消し去ることができれば何とかなるかもしれない。

ユーリは魔法力の全てを回復魔法につき込んだ。

「ヒーリングフォース……！」

部屋中が明るくなる程の凄まじい魔法が、数時間にも及ぶ位、長く続いた。外が闇に閉ざされる頃、遂に魔法力に限界が来たのか、ユーリが倒れこんだ。

「はあ……っ、はあ……」

言葉もかけられない程に疲労しきっているユーリは、息をするのが精一杯だった。

「おい、どういうことだ!? シェーラの体から膿は消えていないぞ!? 治してくれるんじゃないのかっ!?!」

もはや治癒魔法では追いつかない位、シェーラの体は進行していたようである。ユーリは疲労をこらえて再び魔法をかけようとしたが、遂に体を起こす力までなくなってしまうている。そんな状況を見て、フィルはいてもたってもいられなくなったのか、ユーリの首にかけていた精霊石を奪ってシェーラに与えた。

「っ!?!?」

ユーリは声が出なかった為、止めることすらできなかった。

「ほら、シェーラ……精霊石だ。これさえあればどんな病気だろうと何だろうと治せるんだ。もう安心していいぞ。そうだ、最初からこうすればよかったんだ。ユーリには悪いが、なりふり構ってる暇なんかないんだ!」

ユーリはフィルの言葉に唇を噛み、目を閉じた。精霊石に何の変化もない。

「……!?!? 何だ、なんで何も起きない。まさかこれも偽物だというのか!?!」

頭が混乱したフィルは精霊石を見つめて、ただ首をかしげるだけだった。すると、ようやく話せる段階にまで落ち着いたユーリがゆっくりとワケを話した。

「それは真正正銘、本物の精霊石よ。シェーラに精霊石を渡したつて何も起こりはしないわ。それは死んだ者を生き返らせる為だけに

しか力を発揮しないのよ、だからシェーラのような症状には何の反応もない。精霊石なんか……、何の役にも立たないわ」

ユーリの言葉にショックを隠せないフィルは、精霊石を落とした。

「そんな……、じゃあ俺は一体何のために!? 今まで一体何をするためにここまで来たんだ。盗みまでして、一体……っ!」

フィルの心が痛い位にわかるユーリには、傷心のフィルに慰めの言葉すらかけることができなかった。

「ごめんなさい、シェーラの体の進行は想像以上に進んでいて、あたしの魔法力……いえ、もはや魔法すら効かない状態にまでなってしまっていて……」

「それじゃあ、シェーラは……もう……」

絶望だけ残った二人が、己の無力さを痛感していたその時……。

「兄……さん……」

「っ!」

二人はシェーラの方へ視線をやった。

「兄……さん、もう……シェー……ラは、十分です……」

「シ……、シェーラ……!」

フィルは急いでシェーラの傍らまで走って行き、彼女の手を取っ

た。

「話せるのか、しゃべれるんだなシェーラ!!」

ユーリは思った、あの長時間の魔法は決して無駄ではなかったと。体の組織はボロボロになっていて治癒させることはできなかったがその代わり、声帯の組織だけはまだ生き残っていたので魔法の効果が現れたのだ。

「そうだ、この調子で回復魔法をかければ体の方も少しずつ回復していくに違いない!!」

喜びで一杯のフィルは興奮する、しかしシェーラはフィルの言葉に首を振った。

「兄さん、それはできない……できないの。あたしの体はもう、全ての細胞が死んでいて再生することさえ敵わない。自分でわかるもの。でも、声だけは取り戻すことができたわ、ユーリさんのおかげで。最後にお別れの言葉を言えるなんて、きつと神様が与えてくれた慈悲なのね……」

「なに……言ってるんだ、シェーラ!？」

「お願い聞いて。あたしはもうこのまま死を待つことしかできないけど兄さんには、これからがあるわ。あたしの代わりに、全ての命の手助けをしてあげて、全ての生き物が共存できる。あたしの理想の世界を。噂によると……そんな世界を作れるのはこの世で一つ、生き物を分け隔てなく介護する組織……。その組織に入ってあたしの理想を現実のものにしてほしいの。お願い……次に生を受けて大地に立つ時は、そんな世界に生まれたいの」

小さな細い声で、彼女はそう言った。

ゆっくりとフィルにもたれかかり、そして彼女は最愛の兄の腕の中で息を引き取った。

フィルは肩を揺らしながらシエーラを強く、強く抱き締めた。

やがて空の色は明るい光に照らされていく、まるで空へと昇る彼女を讃えるかのよう……。。

ユーリが目覚めたのは、彼女が亡くなった日の昼過ぎであった。

「あ……、いつの間に寝たんだろ」

きよるきよると辺りを見渡すと、回りには何もなかった。フィルもいなかった。ゆっくりと立ち上がると、側に落ちていた精霊石を拾い上げた。そしてフィルの行き場所がどこなのかがわかった。

「あ……、そっか……彼女の……」

精霊石を首にかけるとユーリは外に出て、足を止めた。目の前には、盛り上がった土に木の棒が刺さっており、その前にフィルがひざまずいていた。ユーリはかける言葉が見つからないので、ただ黙ってフィルの後ろ姿を見つめていた。

するとユーリの気配に気付いたのが、フィルから話しかけてきた。

「……よく神父とかがやる手向けの言葉を、シエーラにもしてやっ  
てくれないか」

「ええ、わかったわ」

ユーリは司祭の言葉を真似て、シエーラに最後の別れの言葉を捧げた。

供養も終えて、そろそろ出発しなければならなくなったユーリは、フィルに今後どうするのかを聞いた。

「とりあえず、しばらくはシエーラの言葉に従うつもりだ。種族全てが共存できる世界にするため、そしてそんな世界に転生できるように……」

シエーラの死を受け止めたフィルに、ユーリがさりげなく組織のことを話す。

「そのお、シエーラさんが言った組織についてなんだけどね、多分『モンスターズ・ボランティア』の事を言ったんじゃないのかなって、思っただけど……」

フィルから視線を逸らし、あくまでシラを切った言い方で話し続けるユーリ。

「ああ、あんたさえよければ入ろうかと……」

フィルが言い終わる前に、ユーリは歡喜に溢れた口調で答える。

「ああそおなのー、いやー実に運がいいわねー！！ 只今、我が『モンスターズ・ボランティア』は人手不足で人員募集していたところだったのよー！！」

ユーリはさっきまでとは打って変わって、馴れ馴れしい態度で応対する。しかしフィルの方は、シェーラに関してだいぶ世話になったのでお構いなしといった様子である。

「……よろしく、頼むな」

事を終えたユーリとフィルは、ようやくコロレオネの町に戻ってきた。するとユーリは、もともとの目的が終えたことを伝えに子供たちの家へと向かう。

「わあっ、おばーちゃん、精霊石だあー！　ありがとうお姉ちゃん！」

「いいのよ、それよりお母さんはいる！？」

「台所にいるよ」

「そ、ありがとね」

子供たちに精霊石を返したユーリは（この間、フィルは耳を隠して変装している）、台所へと急いで行く。

「すみませ〜ん、子供たちが失くした精霊石を見つけた者ですけど……」

突然の訪問に驚きながらも、何とか対応する母親。

「え？　はあ……どうもありがとうございます。わざわざ親切に

「どうも……」

「いえいえ、こんな苦とも思っていないせんわ。ところでギヤラの方ですけど、だだっ広い森の中を一日中探し回ったので少し値が張りますけど、ご了承くださいねっ！」

母親とフィルの目が点になる。

「は？」

「精霊石探しは正式にお子さん達から依頼を受けたので、それ相応のギヤラを頂くのは当然でしょう!？」

慌てて言い返す母親。

「でも、そんなもの私は知りません!!」

「知らなくても、報酬を支払う保証人はあなたになっっていますので、これを拒否すると役人に引き渡す事に……」

「そんなっ!! それってあんまり……っ」

母親に続いてフィルも反撃に出る、ただしユーリに向かって。

「お前はボランティアだろ!! こんなことで金を要求するのか!？」

「あのねフィル、基本的なことを忘れてない? あたし達は『モンスターズ・ボランティア』なのよ? つまりモンスターに関する事にはお金を要求してはいけないんであって、こういったノーマルな

仕事には報酬を要求しても全然ノープロブレムなのよ、わかった！  
？」

呆れて物が言えないフィルは、ただ母親と一緒に呆然とする他な  
かった。

「それで、いくらになるんですか!？」

諦めた母親は早く出て行ってほしいため、金額を聞いてきた。

「えつとですね、一日中歩き回った分と、魔法力を使いきった分、  
それに手数料込みで……3万パルになります」

「ちょっと待ってください、その魔法力の分って何なんですか!？」

母親のツツコミにも冷静に答えるユーリ、ここまでくるとプロで  
ある。

「あら、お子様から聞きませんでした？ この精霊石探しの件には、  
あの強敵・エルフも絡んでいたって……」

シン。

ユーリの笑顔に似合わない卑劣な手口に泣く泣く従う母親の姿は、  
悪徳訪問販売で脅される新妻の姿とダブるものがある。その傍らで、  
何かが違うと必死になって言い聞かせるフィルの姿が涙ぐましかっ  
た。

「毎度ありがとうございます、またのご利用をお待ちしております  
!!!」

「二度と頼むかあ　　っ！！」

母親の涙で歪んだ顔がフィルの脳裏に焼きついた。誰だっこんな地獄、味わいたくないものである。ぜえぜえと息を切らす母親を他所に、帰り際で何も知らない子供たちにお別れを告げるユーリの姿には、誰もが殺意を覚える瞬間ではなかるうか。

その合間にもフィルは、自分の選んだ道が本当に正しかったのかどうかわからなくなってしまっている姿も笑える。

しかし、そんな事にもお構いなしなユーリは宿へ帰る間にもフィルに「モンスターズ・ボランテア」の実態について話してくれるのであった。

しかしそれがこれからの人生、あまりにも過酷で苦しいものになるとは今のフィルには想像のできないものであった。

「あたし達のあるべき姿は、常にモンスター第一に物事を考えること！　人間などといった言語の通じる相手は完全に無視することね、あたし達は言語不通のモンスターを対象に仕事をするの。あと、モンスターに関する知識は必要だけど、今から勉強する時間はないから全てあたしの言う通りに行動するのよ？　決して、人間の私情や欺瞞に惑わされてはダメ。今のこの時代に存在するモンスターの中で、凶暴なものはごく一部にすぎないの。だから、資金も心も感情も肉体も全てモンスターに捧げるのがあたし達、ボランテアの理想の姿なわけね！」

ユーリの説明を聞いて、フィルは少しばかり疑問と恐怖を感じた。本当にこの組織に入って良かったのだろうか？

果たしてシエーラの魂が再び大地に還る時、シエーラが望む世界にできているのだろうか。自分で入るといった時とは裏腹に、今では取り返しのつかないことをしてしまったのではないかと不安だけが募るばかりだ。

「なあ、俺達って……ちゃんと人権はあるのか!？」

きよとんとしながらフィルの方を見つめ、そして当然のように言い放つユーリ。

「何言ってるの、そんなのあるわけないでしょ？」

恐怖のあまり顔のデッサンが狂うフィル、しかしそんなこともユーリにとってはお構いなしなのだ。

「帰りたい……、できるものなら今すぐにも帰りたいと本気で願う青年は、夜の町を悪魔のような少女と歩いて行く。

「モンスターズ・ボランティア」のコンビが誕生した瞬間だった……。

終わり……!!?

## 第1章 「金髪エルフと精霊石」 (後書き)

この第1章は1998年に書き下ろしたものに、少し手を加えて書いたものです。もともと文才がないので矛盾や読みにくい点が目立ちますが、その辺は当時のまま残してみました。私の未熟さを堪能してください。

## 第2章 「妖精狩りと魔物嫌い・前編」(前書き)

魔物保護ボランティアに金髪エルフのファイルを加え、ユーリの波乱万丈な旅はますますヒートアップ？

本編「MOLLOCH」の前座的な短編小説として投稿しています。大体全5話を予定してますので、その後本編の執筆活動を始めたいと思います。

## 第2章 「妖精狩りと魔物嫌い・前編」

ここはセアシエル大陸・・・、広大な大陸に4つの国が存在し、4人の王が治める大陸・・・。

魔物が数多くはびこるこの世界、人なら誰しも魔物を恐れて嫌うのが当然の世界。

しかし近年、魔物に対する扱いが変わってきていた・・・。

魔物を恐れて暮らす世界ではなく、魔物と共存して暮らす世界を目指す組織が出現した。

その名も「モンスターズ・ボランティア」・・・。

魔物の救命・保護を目的として、人間と魔物との仲を取り持つことを第一としている。

勿論、危険な魔物も実際に存在するが、彼らは魔物に関する確かな知識を持ち、その生態を

研究することで、人間に危害をもたらさないように導くことで共存を実現させようとしているのだ。

そしてこの世界で唯一その組織を立ち上げて、実際に活動をしている人間はたったの二人・・・。

創設者は若干12歳にして「水の聖都・フォースフォロス国」での神官職を修得するも、暗黒魔術に

手を出してしまったことにより追放される・・・。

その後、独学で黒魔術・白魔術をマスターし、13歳で魔物保護団体である「モンスターズ・ボランティア」

を開設してしまう。

14歳になった現在、とある事件で仲間となったエルフと共に魔物との共存という夢を実現させるために、

日々過酷な毎日を送るのであった・・・！！

「・・・って、何自慢だ！つか何が夢の実現だ・・・っ！過酷な

毎日っ!?!?・・・地獄の日々だっ!?!」

そう言つてサラサラストリートヘアーの金髪を軽やかにたなびかせて、耳が異常に尖つた端正な顔立ちの男が愚痴をはきだした。

その1メートル先をスタスタと歩いて行く華奢な黒髪の少女が、愚痴なんていつものこと・・・とでも

いうように見事にシカトしてそのまま歩き続けていた。

「おいっ!?!聞いてるのか!?!」

「イヤでも聞こえてるわよー。男のクセに愚痴なんてみつともないことはやめなさいな。」

「愚痴の一つも言いたくなるわっ!?!」

毎日毎日資金稼ぎだとか抜かしてギルドの依頼を次々引き受けてきやがって・・・!

誰が遂行してると思っている!?!

全部俺が働いて、ギャラは全部お前が徴収するとはどういう見だっ!?!」

ずかずかと早歩きで少女の横に並ぶと、愚痴の一つどころか次々愚痴を言いだした。

それだけストレスがたまつていて、もはや我慢の限界がきていたのだらう。

それでもエルフの方をチラリと横目で見るだけで、黒髪の少女は軽くあしらう。

「あのねーフィル、最初に言っただけどあたし達は魔物保護のポランティアが本業なのよ?

魔物の保護と一口でいってもやることはたくさんあるわ。

そのためには食費や宿代、魔物保護の内容によってかかる費用・・・。

こういふ組織を運営していくには資金がいくらあつても足りない位なんだから!?!」

それは前にも何度も聞いた・・・とでも言いたげに口をへんの字に曲

げて両腕を組むフィル。

「しかしだな、ユーリ。」

俺はお前の組織に入ってからというもの、もうかれこれ一か月は経過するが魔物に関する

ボランティア的なことは何一つとして、活動している所を一度も見えていないんだがなあ……。」

どうだ核心についてやったぞ……とでも言うような得意満面な表情でフィルが攻撃してきた。

それでもユーリの態度は微動だにせず、フィルの言葉を受け流すことしかしなかった。

「魔物ある所に我らの生きる道あり……よ。」

「怪我するか、ヘタすりゃ死ぬだろ……。」

「それは一般人の場合！ーあたし達での意味は、仕事の始まりだつて言ってるの！ー」

どうにもかみ合わない二人の会話は、森に入ってからずっと続いていた。

ここは妖精の村があるといわれている森、サフィレスの森だ。

うっそうと生い茂った木々には妖精の魔法がかけられていて、一度足を踏み入れれば

侵入者は森に化かされて二度と出られないとさえいわれている。

しかし、南に位置するヘルメス国から北東に向かって、大陸の中央にあるフレイム国へ行く途中にある

「迷いの森」に比べれば子供だましの迷路……という程度だ。

この「迷いの森」に入ればそれこそ、森の妖精の加護がなければ生きて出られはしない。

フィルはエルフの勘で、この森は安全ではないと肌で感じていた。

「なあユーリ、この森を抜けるつもりか？」

わざわざサフィレスの森を通らなくても、ザピスの町を経由していけば目的地にはたどり着けるだろう。」

森に入ってからフィルはピッタリとユーリのそばを離れないように、くつついて歩いていった。

「ザピスをいちいち経由してたら、10日はかかるわ。」

それよりこの森を抜けた方が5日で目的地のラルヴァへたどり着けるんだから……。

多少視界が悪くてもこの森を通った方がかえってラクなのよ。」

「……迷うぞ。」

「あんたじゃあるまいし。」

……沈黙が走った。

そう、つい1週間前のことだった。

配達の依頼で隣町まで届けに行く仕事をしていた時、フィルは隣町とは全く正反対の方角へ向かっていて、

結局その簡単な依頼を達成するのに3日はオーバーしてしまったのだ。

おかげでギャラをもらうどころか、期限内に届けられなかったという事で罰金を支払うハメになっていた。

ユーリはそれ以来、フィルに方位磁石も地図も道案内も頼まなくなったのである。

「オ……、オレの事はともかくだな！！本当にこっちの方角で合ってるんだろっな！？」

森っていうのはな、……怖いんだぞ！？」

「だーいじょーぶだって言ってるんでしょ！？」

ほら、磁石だってちゃんとこうやって東をさして……。」

「……え。」

「……をい。」

ぐるぐると360度、延々と回り続ける磁石を黙って眺めるバカ二人。



「さっきの爆発で森に引火した・・・、大変っ・・・山火事になるわっ!!！」

「お・・・おいユーリっ!!！」

ファイルが止める間もなく、ユーリは煙が上がる方角へ向かって無謀にも走り去ってしまった。

「山火事なんてお前一人でどうにかなるものじゃない・・・、やめろっ!!！！・・・死ぬぞおっっ!!！！！」

## 第2章 「妖精狩りと魔物嫌い・前編」(後書き)

これも前作(第1話)と同じく、私が高校生の時に書き下ろした小説に少し手を加えて投稿しました。

あなたのお時間が許すならば、ぜひ感想などお待ちしておりますので、よろしくお願いいたします。

## 第2章 「妖精狩りと魔物嫌い・中編」(前書き)

森の中で迷子になったと思いきや、突然の爆発で大惨事に出くわす  
ユーリとフィル。

駆けつけるとそこには、滅ぼされた妖精の村と、瀕死の重傷を負っ  
た妖精が横たわっていた・・・!!

## 第2章 「妖精狩りと魔物嫌い・中編」

金色の長髪をたなびかせて、男は走る。

森の中・・・、先刻までは静寂に包まれていた森が一瞬にして黒と赤に染まっていく・・・。

赤い炎がチラチラと木々に引火していると思えば、奥の方から真っ黒い黒煙が立ちこめており熱風と共に、男の行く手をさえぎる。

ただの山火事などではなかった・・・、大きな爆音と共に森が一瞬振動したかと思うと

爆心地と思われる場所から黒煙が舞い上がっていたのである。

「ユーリ！！無茶するんじゃない！！」

これはただの山火事なんかじゃないんだ、爆発を起こした犯人がまだうるついているかも

しれないんだぞ・・・っ！！・・・ユーリ！！」

金髪のエルフ・・・フィルが、必死にユーリと呼ばれる連れを追いかけながら回りに注意を払う。

爆発の中心地に犯人がいるはずがない、それだと自身も巻き込まれるからだ・・・。

爆心地から一定の範囲内はまだ犯人がいるのかもしれない・・・。

森にこれだけの威力がある「攻撃魔法」を放ったのだ・・・、ただの人間でないことだけは

確かだった。

・・・と、一瞬空気が変わった。

さっきまで肌がジリジリする程の熱風があっただが、一瞬空気がユーリの向かった方向に

吸い込まれるようにサーーッと流れていってしまい、熱が冷めていったのである。

すると突然水分を含んだ霧状の空気が、吸い込まれていった方向を

中心にブワツと弾けたように突風となつて、周囲の温度を一気に急降下させた。木々や枝葉に燃え移っていた炎は、先ほどの水分を含んだ突風にさらされたおかげで完全とまではいかないが、くすぶる程度に鎮火した。

周囲が湿った空気で蒸していく中、木々の間から黒髪をした少女、ユーリが立っているのが確認できた。すぐさま駆け出し、・・・そして今のこの現状をフィルは、愕然と見渡した。

「これは・・・っ!」  
恐らくここが爆発の中心地であつたのだろう・・・。  
辺り一面焦土と化していたが、ところどころ「ここ」にあつた物の残骸が目に入った。

小さく、確認しづらかつたが「ここ」には確かに何かの生活の跡が・・・かすかに残っていた。  
木の枝で作られていたであろう家・・・。  
そしてあちこちには小さな何かが転がっていた。  
よく見るとそれには羽根が生えており、どれも完全に焦げているか・・・半端に焼けた為に  
重度の火傷の跡で皮膚が焼けただれている・・・妖精の死骸だつた・・・。

「うっ・・・!!」  
自分の足元に「何」が転がっているのか、ようやくハッキリと目で確認したフィルは焼け焦げた臭いの中に、生き物が焼けた異臭が混じっていることに気付き・・・吐き気をもよおす。

「ユーリ・・・っ。」  
ユーリは呆然としているのか・・・何かを探しているのか・・・、ずっと下をうつむいたままだった。

フィルがすぐ側まで近付いて・・・、ようやく口を開いた。

「・・・森が完全に炎で包まれる前に、水の魔法で辺り一面を吹き飛ばしたんだけど・・・。」

爆心地に・・・、妖精の村があつたこの場所まで来た時には・・・もう、手遅れだったわ・・・。」

「・・・そうか。」

それを聞いたフィルは、何と声をかけたら良いかわからず・・・ただ小さく返事をした。

すると、少し先でカタン・・・と物音がした。

「!!!」

二人とも物音に敏感に反応すると、すぐさま駆けつけた。

生き残りがいるのかも知れない・・・!

そんな希望を持って走り寄ると・・・、そこには小さな妖精が・・・外見上、人間でいえば

40代後半位だろうか・・・少し老けた妖精が全身大火傷で必死に自分の上に乗っかっている

木の枝をどかせようともがいていた。

フィルは急いでその細い木の枝を片手で掴んだ瞬間、ジュツと手の平が焼ける嫌な音がした。

「・・・くっ!!!」

それでも構わず掴んで木の枝を放り投げると、妖精の男を手で拾い上げたらしいものか・・・、

どうしたらいいのかわからず、指でそつと触れながら「しっかりしろ、大丈夫か!？」と声をかけた。

介抱に困るフィルを見て、ユーリは「どいて」と言うтусかさず「回復魔法」を妖精に施す。

ユーリの手の平からまばゆい光が優しく立ちこめ、その光は妖精を優しく抱きこむように包んだ。

回復魔法が徐々に効いてきているのか、男はゆっくりと目を開けるとユーリ達を見て声を出した。

「たの・・・む・・・。」

体の小さい妖精だ・・・、その声も耳をすぐ側まで近付けないと聞き取れなかった。

ユーリは魔法をかけるのに手一杯だった為、フィルの大きく尖った耳を妖精に近付けようとした。

・・・が、ユーリの方をチラリと見ると目で合図され、暗黙に悟ってフィルはそつと妖精を手の平に包んだ。

こうすれば地面に横たわらせたままよりは、耳を近づけることによつて魔法の邪魔にならずに済んだからだ。

「たのむ・・・、娘だけ・・・はっ。」

娘の命・・・だけは・・・っ、助けてやって・・・くれ・・・。」  
息絶え絶えな男の願いに、フィルはもつと詳しく聞くため妖精を見て囁いた。

「その娘というのはどこにいる!？」

安心しろ、俺達はたまたまここを通りがかった旅人だ、お前達を襲った輩などではない!!」

「あたし達は生物保護のボランティアをしているの!!」

安心して話してちょうだい、その娘さんを必ず助けてあげるから・・・、だから今どこにいるの!？」

ユーリは魔法に集中しながら、出来るだけ妖精の男が安心できるように優しく声をかけた。

フィルに対する態度とは雲泥の差がある・・・（あり過ぎるといつてもいい・・・）

ちなみに「魔物保護」ではなく「生物保護」と言ったのは、妖精は厳密に言えば「魔物」の分類には

入らず、しかも妖精のそのほとんどが自分達を「魔物」呼ばわりすることを極端に嫌っていた。

余計なことを口走り、ただでさえ瀕死の状態を更に悪化させること

はない・・・と判断したためだ。

「娘は・・・っ、鷹・・・派に・・・。」

そう言い残すと・・・妖精の男はフィルの手の平でそつと・・・、静かに息を引き取った・・・。

「ただの回復魔法じゃ・・・、全身80%以上の火傷を完全に治療することが出来なかった

みたいね・・・。」

まるで他人事のようなセリフだったが、ユーリの表情は明らかに苦渋で満ちていた。

回復魔法を扱えるのに、癒し、復活させることができない・・・という無力さ・・・。

それをまざまざと痛感しているのは、他の誰でもない・・・、ユーリなのだ。

それがよくわかっていているからこそ、フィルもあえてそれ以上は何も言わなかった。

「あたしに神聖魔法が使えたら・・・、救えたかもしれないのに・・・。」

あまりにか細かい嘯きだったので、フィルにも最後の言葉は聞き取れなかった。

フィルは妖精の亡骸をそつと地面に置くと、途方もなくユーリに訊ねた。

「どうするんだ・・・。」

ここで亡くなった妖精は20体やそこらじゃないぞ・・・、全部埋葬するには時間がかなり

かかってしまう。

その間にも、この妖精の娘ってやつを助け出さなければならぬ・・・。」

しばらく考え込むと、ユーリは深いため息をついて提案した。

「埋葬はきちんとしなきゃ・・・。」

多分それ程時間はかからないはずよ、この村はざつと見てそれ程

大きくないみたいだし。

それに埋葬した後でも、妖精の娘は・・・多分そう遠くへは行ってないわ。」

「どういう意味だ？」

「この妖精はさつきへ鷹派って言ってた・・・。」

鷹派っていうのは、魔物討伐を生業・・・いいえ粛清と称して残酷な行為を繰り返す連中の

ことを言っていたのよ・・・恐らくね。

へ娘の命だけは・・・へ娘は、鷹派に・・・って言葉から察するに、この妖精の娘だけ

連れ去られたっていう可能性があるわね。

その娘だけ連れ去られたってことは、殺す以外の価値を見出したか、売り飛ばす気にもなった

のか・・・、その目的まではわからないけれど・・・とにかく奴らの現在の居場所だけなら

とっくに見当がついてるわ。」

ユーリの意外な答えに驚くフィル。

亡くなった妖精が最期に遺した言葉の中に、これだけの意味が込められていたこともそうだが、

その推理力とでもいうべきか・・・、時々ユーリの頭の中はどうなっているのだろう・・・と

思う時がある。

しかし今はそんなことに感心している場合ではない、フィルは言葉の続きを急かした。

「何か心当たりがあるのならば早く言え、俺達には時間がないことに変わりはないのだろう!？」

「ザピスの町よ。」

「は・・・?お前が経由するのを拒んだ町のことか?」

「ラルヴァまでの道程に、ザピスを経由するのが面倒だったのもあるけどね・・・。」

本当は今ザピスの町は鷹派の連中が旅の拠点にしているってのを、情報屋から聞いてたのよ。

活動内容からいってあたし達と鷹派の連中は相容れない存在同士なわけじゃない？

いちいちもめるのも面倒だったから、この森を突っ切るっていう無謀を選択したって……。」

「やっぱり無謀覚悟でこの森突っ切るつもりだったのか!!」

ユーリの本音を聞いて、途端に激昂するフィル。

この森に入る前から嫌な予感がしており、入るのを拒んでいた張本人だからだ。

「今はな些細なことで論議している場合じゃないでしょ!!」

さつきも言ったように今のあたし達に残されてる時間は数少ないってことを忘れないで!!」

……と、さつきの失言を忘れさせようとしているような言い回しに多少の疑念を抱きながら、  
反論はしなかった。

時間がないっていうのは本当だからだ。

爆発の高温で燃え尽きた妖精がほとんどだったためか、14〜5  
体程の焼け焦げた妖精の

遺体を集めてきて、ユーリ達は恭しく妖精達の亡骸を埋葬した。

「妖精」という位だから何か特別な埋葬方法でもあるのかと思いきや、至って人間の時と大差なかった。

埋葬が済むと、ユーリはわき目も振らず森の出口へと突き進んでいった。

ついさつきまで森で迷子になった人間とは思えない早足だった。

ユーリいわく、妖精の村があった場所が目印となり、現在地と森の出口への方角を確認できたらしい。

目的地は急ぎよ、ザピスへと変わり歩を進める。

ユーリだけではなくフィル自身にも、言い知れぬ緊張が徐々に増していた。

妖精の森をあそこまで徹底的に破壊してしまう程の、鷹派の連中・

フィルは一度もその存在すら知らなかったことなので、想像するしかできなかつたが・・・この先の

展開の予想は大体ついていていた。

妖精の娘を取り戻すには、間違いなく鷹派の連中とまみえることになるはずだ。

場合によつては戦闘になるのかもしれない・・・。

魔物相手ではなく、人間相手と殺し合うことにもなりかねない。

そういつた緊張が、ザピスの町が見えてくるに従つて・・・鼓動が高鳴つていくのがイヤでもわかつた。

暗く、少し陰気な宿屋の地下室にロウソクの火だけを灯して男達が酒を酌み交わす。

戦士風の筋肉質な男に、陰険な目つきをした黒魔術師風の男、部屋の隅でムスツとしながら

腕組みをして壁にもたれかかっている、中性的で男とも女とも判別しにくい人物・・・そして

この中の、恐らくはメンバーの中心である野心的な顔つきをした男が・・・笑いながら酒を飲む。

「今回はたつぷり仕事をやりきつたつて感じだなあ、おい!!」戦士風の男が言う。

「この俺の魔術にかかればどんな森も一瞬で消し炭さ・・・」と、自慢しながら黒魔術師が笑う。

「全部粛清してやつてもよかつたんだがなあ・・・。

そろそろ金が底をつく頃だ・・・、これだけ若い妖精なら結構な値で売れるはずだぜ。」

野心的な男が鳥かごを左右に乱暴に振りながら、指を中に突っ込もうとした。

「・・・途端、鳥かごの中から怒声と同時に思わぬ攻撃を食らう。

「いってえ・・・、この野郎がつ！！生意気なゴミ虫がつ！！逆らうんじゃねえ！！」

怒鳴ると鳥かごを壁に向かって思い切り投げ飛ばした。

「あつ・・・！！」

鳥かごの中から苦痛の悲鳴が聞こえた。

その悲鳴を聞いて、誰か哀れに思って駆け寄るのかと思いきや下品な笑い声が部屋中に響き渡った。

「いっちょ前に痛がつてんのかあ！？がはははははっつ！！」

「おい、傷だけはつけるんじゃねえぜ。高く売れなくなっちまう。」

大声で笑う3人を他所に、中性的な人物が鳥かごを拾い上げると酒樽の上に置きなおした。

「ルファ、そんな虫は放つといてお前も飲めよ。」

「オレは酒は飲まない。・・・空気が悪いから外の空気でも吸ってくる・・・。」

言うと、上へと続く階段を上りかけて振り向きざま釘をさす。

「それからその妖精・・・ぞんざいに扱うんじゃねえよ。」

傷があつたり、不健康だったりするとそれだけで値が落ちるんだ。

「・・・気をつける。」

それだけ忠告するとさっさと上へあがつて行った。

扉がバタンと完全に閉まると、さっきまでの笑いがかすれていった。

「へっ、あいつも生意気さに磨きがかかってきたんじゃねえのか！？」

「女の癖しやがって男の真似ごとなんざ・・・でもまあ、確かに役には立ってるがね。」

酒をちびりと飲むと、魔術師の男が渋りながらつぶやく。

「そう言うな、女であるうと生意気であるうと・・・我々と志を同じくする者なんだ。」

必要以上に仲良くしろとは言わないが、チームワークは乱すんじゃない。」

野心的な男がなだめるように言う。

「あいつは心底魔物を憎んでやまない……。」

魔物に最愛の家族を殺されて……全ての魔物をぶつ殺そうとしてるんだ。

立派な同志じゃないか……。」

そう言うと、男達は再びジョッキに酒を溢れる程つぎたすと、それを一気に飲み干した。

宿屋の2階にあるテラスまで来た「ルファ」と呼ばれた中性的な顔をした人物……女性は

テラスに寄りかかって、遠くの森を眺めていた。

遠くの森……妖精の村があつたサファイレスの森を……。

その目には、悲しみと憎しみが入り混じった感情しか映っていないなかつた。

ゆっくりと両目を閉じて……、そしてまたゆっくりと両目を開く。

その目には、……悲しみと後悔が映し出されていた。

「父さん……、オレ……。」

……あたし、間違つてなんかいないよね……。」

一言そう呟くと……、ルファはそのままテラスにあつた椅子に腰をおろして……テーブルに

顔をうずめた。

## 第2章 「妖精狩りと魔物嫌い・中編」(後書き)

前後編のつもりが、終われませんでした・・・。

どうしても読んでくださる方にわかりやすく表現しようと思ったら文章が長くなってしまいました・・・。

次回こそ第2話完結のつもりで、執筆頑張ります。

わざわざ読んでくださった方、よろしければ次回も読んでくださるととても嬉しいです。よろしくお願いいたします。

## 第2章 「妖精狩りと魔物嫌い・後編」(前書き)

妖精の娘をさらった鷹派の連中を追ってザピスの町へやってきた  
ユーリ一行。

ユーリ達は妖精の娘を無事に取り戻すことができるのか!?

## 第2章 「妖精狩りと魔物嫌い・後編」

ザピスの町、そこは旅人や行商人が誰もが一度は立ち寄る流通の通り道として少しは

栄えた町だった。

なぜなら、この先にあるラルヴァの町に向かう為の道が2種類あるからだ。

1つは、通常のこのザピスの町を経由してラルヴァへ向かうルート。

ラルヴァの町は商業に発展した町で、旅人や行商人が多く目指す町となるので、

その通行にザピスの町を経由し、ここで旅に必要な道具や食糧、疲れを癒す宿に泊まったりする者が多いのだ。

もう1つは、サファイレスの森を通るルート。

こちらはザピスの森を経由するよりずっと短期間でラルヴァに辿り着けるのだが、この道

を選択する者は少ない。

なぜならこの森では磁石が効かず、迷いやすいからである。

それにこの森には昔から妖精が住むと言われていて、人々の間では妖精の魔法によって

迷わされる・・・と言われる程なのだ。

自分勝手な理由で、無謀にもこちらのルートを取る旅人も・・・たまにいたりする。

しかしその無謀な選択を取った旅人によって、ある暴虐な行為が明るみに出た。

サファイレスの森にあるという妖精の村が、何者かの手によって滅ぼ

されていたのだ。

それは攻撃魔法による爆発により、村は壊滅・・・生き残りも最後の一人の遺言を遺し

この世を去ってしまった。

彼らを看取り、埋葬した無謀な旅人・・・。

一人は黒髪のショートヘアで、透けるような白い肌をした黒い瞳の少女。

ユーリ・エルロンと名乗る少女は、破戒僧であり魔物を保護・救済する組織の創設者だ。

年齢は若干14歳で、魔物に関する絶対的な知識を持っており、当時わずか10歳の時に

「水の神官国・フォースフォロス」で白魔術を修得するも更なる知識を求める余り黒魔術に手を出したことにより追放されてしまう。

その後は魔物保護のボランティア活動を主として、このセアシェル大陸を渡り歩いている。

もう一人はユーリのパートナーで、金髪のロングストレート、尖った耳が特徴のエルフ。

フィレミアム・カルテットは、最愛の妹を亡くした時に妹が夢見た「魔物と人間の共存」を

実現させるべく、ユーリと行動を共にすることになった。

精霊を使役する魔法と剣技と方向音痴を得意とし、状態異常耐性が人間以上に高い。

そんな二人は今、ようやくザピスの町に辿り着いた・・・。

自分達が最期を看取った妖精の、最期の頼みである攫われた娘を救うべくこの町に来ていた。

ユーリの推測では、妖精の娘を攫ったのはユーリ達魔物保護とは全

く逆の・・・魔物を忌み嫌い  
この世から排除しようとする残虐非道を繰り返す強硬派・・・、鷹派の連中と踏んだのだ。

ユーリ達は、まず旅の常識・・・酒場で情報収集することとなった。その酒場の地下に・・・、現在鷹派の連中が旅の拠点としていることも知らず・・・。

酒場に入っていくと、そこは相変わらず酒やたばこの臭いであふれていた。

まだ昼間だというのに酒場では、全員がグラスやジョッキに酒を注いで飲み干していた。

ユーリ達が入ったら酒場にいた連中の半分以上が、ギロリとこちらを睨んできた。

酒場では色んなドラマがある・・・。

親の仇を探す者、あこぎな商売で客寄せ目的に立ち寄る者、魔物討伐の任務で立ち寄る者、

中には宿敵同士だったり商売敵だったり・・・、色々な事情を抱えた者がこの酒場にはたくさんいた。

しかし、ただ酒場に入っただけでここまで睨まれるのは滅多にないことだ。

全員ユーリを見て人相を変えていた。

この世界では（セアシエル大陸だけかもしれないが・・・）、女性には髪を切ってはならなかった。

切っても必ず肩より長く伸ばさなければいけないというのが常識だった。

しかしユーリは、右側だけは肩に近い位の長さがあるが・・・そこ以外は完全なショートだった。

髪をショートにする女性は女性とはみなされない・・・、つまり異

端に近い行為なのだ。

ここでは女性が髪を切る行為には、特別な意味を示していた。それは、髪を肩以上に短くすることで自分はすでに女を捨てた……という意味。

そして、一生結婚することがない……尼僧の戒律に近い意味もあった。

ユーリはこういう視線で見られることに不快感を感じるどころか、完全に無視をしていた。

慣れているのだろうか……？と、フィルは思ったがそれとは少し違っていた。

むしろ、器の小さい輩に用はない……という見下した態度から出たものだと思った。

睨んで来ても、別に絡んでくる様子もない……。

フィルは少し怪訝になりながら、ユーリの後について行った。ユーリはカウンターにいるマスターに話しかける。

「ねえマスター、ちょっと聞きたいことがあるんだけど？」

ユーリがカウンターに寄りかかってマスターを見ると、マスターの顔色が少しこわばる。

「これはこれは……、まさかこの町に『黒髪の君』が現れるとは思いませんでした……。

何せこの町はラルヴァ程、大きなギルドがなければ闇市場もない……ごく普通の宿場町

ですからね……。

貴女の悪名……あまねく轟いておりますよ……。」

そう言うと、畏怖を込めた眼差しでグラスにルートヴィアを注ぐと、そっとユーリに出した。

ユーリはグラスを手に取るが、口は付けずにジッとマスターを見ているだけだった。

「そう、それなら話が早いわね。」

あたしのことを知っているというのなら、あたしの質問には素直に答えた方がこの町の為だって

ことを忘れないでちょうだい。」

ニヤリと脅しをかけたその笑顔には、さすがのフィルも背筋が凍る。しかしフィルの場合は、このマスターが知るユーリの恐ろしさとは全く別のものだった。

この数日間の旅の中で、フィルは散々ユーリのワガママや暴力や暴言に悩まされていた。

それが走馬灯のように思い出されたからなのである。

フィルはそもそも、ユーリが『黒髪の君』と呼ばれていることも悪名のことも知らなかった。

ひとつだけユーリが他と違っていると感じていたこと・・・、それは冒頭にも説明したように

短髪の少女を見たのは初めてだったのと・・・、このセアシエル大陸で黒髪の人間を見たのは

生まれて初めてだったからだ。

それ程、黒髪・黒い瞳をした人間は稀だった。

フィルのことは全く目に入っていないユーリは、マスターに質問を投げかけた。

「実はあたし達ここに来る前にサフィレスの森にいたんだけどさ・・・、情報通のマスターの

ことだから最後まで言わなくてもわかると思うけど、妖精の村が壊滅されてたのを目撃した

のよねえ・・・。

そこで最後の生き残りだった妖精の話では、あるモノが盗まれたって聞いたんだけど・・・

何か知らないかしら？」

ユーリは『妖精の娘』と言わなかった。

何か考えあつてのことだとは思うが、確かにここでは人の目や耳があり過ぎる。

あつた出来事をそのまま全て吐露するのはあまり利口ではないと、  
フィルも納得した。

マスターはユーリから視線を逸らして質問に答える。

「ええ、確かについさつき入った情報ですね。」

さすがは『黒髪の君』でいらつしやる……、まさか滅ぼしたの  
は貴女……というワケじゃ

ありませんよねえ……？

魔物の保護を目的としている貴女に限って……。」

そうマスターが言つと、酒場にいた殆どの連中が一斉に大声で大爆  
笑した。

「魔物の保護だとおっ!？」

はっ、本気でそんなことしてるヤツなんざ初めて見たぜ!!！」

「頭がイカれちまつたんじゃねえのか!？魔物なんか百害あつて一  
理なしだぜ!!！」

回りから浴びせられる悪口雑言の数々……、いつものユーリなら  
口で叩きのめしているところだ。

……しかし、ユーリの顔には笑顔が保たれていた。

「マスター?質問の答えになつてないわよ?」

「そうでしたね……申し訳ありません。」

私の情報に寄れば、サフィレスの森が何者かの魔法によって吹き  
飛ばされた……というのは

聞いていますが、妖精の村だというのは初耳です。

先ほど国の兵士たちが状況確認と事態の收拾に駆けつけていると  
ころです。

盗まれたモノについては……、存じません。」

ふん……と言つて、ユーリは酒場を見渡した。

じろじろと嫌な視線でこちらを見てくる男連中は放っておいて……  
、何かを探すように目ざとく

ユーリは視線を配つた。

そして、ふうつと溜息をつくや否やユーリは「それじゃ」とルート

ヴィアの代金を支払って酒場から

出ていこうとした……、が。

「おうおう姉ちゃん、帰るのが随分と早いじゃねえか……。

俺達とちよつと遊んでいけよ……、楽しいぜ。」

……と、筋肉の固まりの大男がユーリの行く手をさえぎる。

ユーリは見上げると、面倒臭そうな態度で大男の横を通り過ぎようとする。

しかし大男は行かせなかった。

「無視することだねえだろ……、クソアマが……この俺様がかわいがってやるって言ってんだ。

ちったあサービスでもしろや！」

そう言うと、ユーリの腕を無理矢理掴もうと手を伸ばしてきた……、しかしその手を止めたのは

フィルの細腕だった。

大男の腕がそこで止まる、ふるふると腕が震えて、苦痛に表情がゆがむ。

「い……っででででっ！！は……っ放しやがれ……この野郎がっ！！！」

そう言われ、フィルはぱつと手を放すと大男はあまりの激痛に掴まれた腕を逆の手でさすった。

しゃがみこんだ大男に向かってユーリが不敵な笑みを浮かべて言い放った。

「このあたしに逆らうってことは、この下僕第1号君を敵に回すってこと……忘れないでね。」

「誰が下僕第1号だ……！！てゆうか今後も増やす予定かっ！？」聞き捨てならないフィルがユーリに反論、が勿論言いくるめられてしまう。

酒場を再び出ていこうとしたその時、ユーリはふつと……扉の端に何かを見つけた。

しゃがみ込んで左手の手袋を取って、スーッと扉の端に付いている

ものを人差し指でふき取った。

じつとよく見ると、何かキラキラとした粉のようなものが付いているのが肉眼で確認できた。

「なんだ……？」と聞くフィル。

「鱗粉よ……。」

「鱗粉つて……、蝶や蛾の羽についてる粉のようなものか？なんでもそんな所に落ちてるんだ？」

「さあ、なんでかしらね？」と、あからさまにマスターに聞こえるようなワザとらしい大声で

そう言い放つと、ユーリはそれ以上マスターを突っ込むこともなく、酒場を出て行った。

ユーリの行動に、マスターの額に汗が滲み出る。

呼吸を荒くしながら、マスターは酒場の奥にある個室に3回ノックすると中から男の返事が聞こえた。

「ここはもうダメだ……、さつさと勘定払って出て行ってくれ……！！」

これ以上はかばいきれん！！」

怯え……焦りの混じったマスターの声を不審に思ったが、中にいた男がドアを開けて顔を出す。

この戦士風の男は鷹派の一味の一人であった。

「なんだ一体……、どうしたっていうんだよ！？」男は言う。

「さつきここにあの『黒髪の君』が来た……、明らかにお前達を探していたぞ……っ！！」

悪いことは言わん……、盗んだモノをとつと返してずらかるんだな……。

あの女に目をつけられたらもう、生きてこの町から出るのかなわんぞ……っ！！」

大袈裟な……とても言いたげに、男は中にいるリーダーらしき男に告げる。

するとリーダーの男の目つきが変わった。

「あのバカな組織を立ち上げた女がこの町に来ている・・・だと!?  
上等だ・・・、今こそ粛清の時だ・・・!!」

全員武器を持ってついてこい!!馬鹿な理想を掲げた愚か者を狩りに行くぞ!!」

そう言うのと、中から返事は返ってこなかった。

「どうしたっ!?返事が聞こえないぞ!!」

ラルハルム!?」

ラルハルムと呼ばれた魔術師の男は顔面蒼白になり、持っていた杖をガクガクと震わせている。

「ラルハルムっ!!!?」

「コウエン・・・、そいつだけはヤバイ・・・。ダメなんだよ・・・っ!!」

震える声でラルハルムが告げる。

「たかがガキ一匹だ、何を怯える必要があるんだよっ!?」と、これは戦士風の男。

「お前・・・何も知らないのかゲラルク!?」

『黒髪の君』の悪名を知らないのか!?『金の亡者』というのは一般的な悪名だがな・・・。

その本性は世にも恐ろしい・・・っ!!

2年前の大事事件位、お前も耳にしたことはあるだろう、砂漠の大  
国ブレイズで起こった

ドラゴンロードの話を・・・!!

あの大陸の英雄王マッシュですら手こずったドラゴンロードを、

世界で唯一倒したといわれる

伝説の女魔術師・・・っ!!俺達黒魔術師ですら扱いが難しい古  
代語魔法をいとも簡単に

マスターし、その魔力は宮廷魔術師の域を超えているとすら云わ  
れている・・・!!!!」

興奮したラルハルムが更に続ける・・・、流れ出た冷や汗でローブ  
はぐっしより濡れていた。

「魔物保護とは仮の姿さ……、ヤツは魔物と言葉を交わし従わせている魔族だという噂だ!!」

その証拠がああ黒髪……っ!!このセアシェル大陸で黒髪を持つ意味は『破壊の女神』を表す。

この世界を混沌に陥れた伝説の破壊の女神エルバ・カーティスの転生した姿だと云われているんだ!!

だからあの女が修学していたフォースフォロスにある魔術学校の最高峰『セストラル』を追放させ

られたんだ……っ、フォースフォロス出身の魔術師の間じゃ有名な話だ……。」

そう一気にしゃべると、喉が渴いたのか、自分を落ち着かせる為か……酒の残ったグラスを飲み干した。

ゲラルク……と呼ばれた戦士風の男が、半信半疑で口をはさむ。

「でも、お前の話……全部噂話の領域じゃねえか……。」

しかし鷹派のリーダー、コウエンは頭ごなしに疑ったりはしなかった。

「確かにラルハルムの言葉は少々オーバーに聞こえるが、それ程恐れることもない。」

「なんでだ……っ、あんたはあの女の魔力を知らないからそんなことが言えるんだ……っ!!」

「オレの聞いた話では、そいつは今……女を捨てたそうじゃないか……。」

つまり……、髪を短く、バツサリと切り落とした……そういうことだ……。」

ニヤリと含み笑いを浮かべるコウエンに、意味がわからないとでも言いたげな表情でゲラルクが首を傾げる。

しかしコウエンの言葉の意味を察したのか、ラルハルムはハツとなる。

「そうか……、髪は魔力の源……。」

元来……魔力の源は、長く伸ばした髪に宿るといわれている……

「！！！」

「しかし今のヤツは、・・・短髪だ。」

ラルハルムの言葉の続きをコウエンが引き継いだ。

「・・・納得したなら、さっさと武器を持ってついてくるんだ・・・」

男達は武器を取り、個室を出て行った。

彼らのやり取りを部屋の隅で聞いていたルファは、無表情に弓矢を手にするコウエンに従った。

一方ユーリ達は買い物をしていた。

値切りするユーリの姿に、さすがに苛立ちを覚えたのかフィルが我慢しきれずユーリを怒鳴る。

「おい何ノンキに買い物なんてしているんだ！！妖精の件を忘れたのか！？」

早くしないと奴ら、次の町に向かってしまっぞ！！」

イライラするフィルを他所に、ユーリは薬草や毒消し草など旅の必需品を補充していた。

「わかってるわよ、そう焦らなくなっただって向こうの方からやって来るんだから・・・慌てないの！！！」

「・・・どういう意味だ！？」

緑色に鈍く光る鉱石を手にとって眺めながらユーリが答える。

「さっきも言ったでしょうが、あの酒場のマスターは鷹派の連中とグルなのよ。」

あたし達が酒場を出て行った時には、もうあいつらにあたし達のことを知らせているわ。」

「だったらなおさら・・・っ！！！」

「だから大丈夫なんだってば！！鷹派の連中の目的はこのセアシエル大陸に存在する全ての魔物の

せん滅を目的とした団体なのよ。

そんな連中が、魔物保護を目的としたあたし達がこの町に来たこ

とを知ったらどうすると思う?」

「・・・あ!」

「そう、あいつら確実に相反する思想を持った敵を倒しに、血気盛んにやってくることでしようね。」

余裕そのもののユーリを見て、フィルはめまいがした。

「それじゃオレ達がヤバイっていう意味なんじゃないのか・・・? 相手は一人や二人じゃないんだろう!? しかもサフィレスの森をあそこまで破壊する魔術師がいる

ってことなら、相当にヤバイ連中を相手にすることになるんだ・

「。。。」

「ま、ここで戦闘になれば・・・確実に無関係の一般市民まで巻き添え被ること

この上ないでしょうね。」

「お前・・・っ、本気でそんなこと言ってるのか・・・!?!」

突然フィルの脳裏に、さっきの酒場でのマスターの言葉が甦ってきた。

ユーリは先ほど手にしていた緑色の鉱石を5個程購入すると、バッグに大事にしまい込んで立ち上がる。

「・・・来たわね。」

ユーリの言葉に、・・・え?と振り返ると後ろにはショートソードを構えた男、戦士風の男は斧を・・・。

そして後方には杖を構えた魔術師風の男が身構えていた。

周囲が彼らの武装した姿を見て、悲鳴を上げながら家に、店に、避難しようとする散り散りになっていった。

ユーリが買い物をしていた露天商の男も、オロオロと慌てながらすぐに店をたたんで逃げて行った。

ショートソードを構えた男が開口一番物騒なことを言い出した。

「よう、お嬢さん。」

悪いが死んでもらうぜ?」

「んなこと言われて、OK・・・とても言うと思ってんの?」

腰に手を当てて仁王立ちするユーリは、ひるむことなく男に向かって言い放った。

そして呪文の詠唱に入ろうと身構える……が。

「おっと、呪文の詠唱はさせないぜ!？」

お前達からはわからないだろうが、こっちは魔術師の他に遠距離攻撃を得意とした弓使いがこの町

のどこかでお前達を狙っている……。

妙なマネをすると、お前達めがけて矢が飛んで来るぜ……。」  
ユーリの表情から笑顔が消える。

フィルも身構えるが、武器に手をやるとどこから矢が飛んで来るかわからないので、柄に手をやること

すら出来ない……。

「そうそう、そうやってお前達は何も出来ずに俺達に殺されりゃいいんだよつ!!！」

そう言っつて斧を持った戦士が、ユーリ達めがけて斧を振りかざしてくる。

その一瞬、ユーリが叫ぶ……。弓をどこから構えている人間にも聞こえるように。

「あんた達は自分達の理想を追い求める余り、大きな間違いを犯していることに気付いていない

みたいねっ!!！」

そう叫ぶと、戦士は少し意表を突かれて斧を持った手が止まる。

「どういう意味だ……?」と、メンバーの頭らしき男がショートソードの刃先を下に傾けて問う。

「あんた達は魔物討伐という名目で、各地で魔物を惨殺してきた……。

中には人間に対して全く無害な魔物に対しても……、同じように抹殺してきた。違う?」

ユーリの言葉に男は、へっ……と笑うと素直に答えた。

「魔物はみんなこの世界には必要のない害虫だ。」

オレ達はこの世界を綺麗にするために、争いのない平和な世界にするために戦ってるんだよ!!」

男の言葉に、ユーリの表情に微かに嫌悪感の入り混じった感情が表れ、眉間にシワを寄せる。

しかし相手の挑発に乗らないよう、あえて男のセリフの内容には触れないように努めた。

「熱心なこと・・・、でもね。今回だけはマズかったわね。」  
挑発に乗ってこないユーリに、男は「なんだと?」と聞く。

「あんた達の目的は魔物のせん滅なんでしょ?でも今回あんた達がやった行為はただの虐殺行為よ。」

この大陸全土で統一された法律に記されてる内容によると、妖精はね・・・『魔物』の部類には

当てはまらないのよ!?

だから悪魔に分類される妖精以外の、森の妖精なんかは数が少なくなってきたために希少保護動物

に指定されていて、むしろ人間の手に触れてはならない生物のランクに入っているわけ!!

それを侵したらどうなるか・・・、無期懲役ならまだしも・・・、最悪極刑ってことになるわね。」

それを聞いた連中の顔に、少し焦りが滲んだ。

「デタラメを言うな!!」苦し紛れに叫ぶ戦士・・・。

「そもそも魔物討伐には条件があつてね、人間に実害を与えた場合以外、魔物には関与しないように

法律が改定されているのよ!!?

人間に実害を与えて、凶暴かつ今後の被害も予想され、その生態や種類、色々な審査を通つて初めて

正式に魔物討伐の認可が決定されるわけ・・・。

それもせずただやみくもに、見かける魔物を次から次へと殺していけば、ただの殺戮者よ!!」

ユーリの迫力ある理論に、誰一人として反論できずにいた。

加えてユーリが続ける。

「国の兵士がサファイレスの森の状況確認に行ったのはガセネタじゃなかったようね。」

今頃、妖精の村を襲撃した犯人を突き止める作業に入ってる頃だと思っけど……?」

「……くっ!!!」

男が周囲に目を配る……、町に兵士がいないかどうか探ったのだ。「……妖精の娘をさらったでしょ?

売り飛ばすつもりかどうか知らないけど、大人しく渡しなさい。

だったら、あんた達の見逃してやってもいいわよ?」

ユーリの意外な言葉にフィルが激怒する。

「何を言っているユーリ!!こんなヤツらにチャンスを与える必要はどこにもないだろう!!」

「渡すの?渡さないの!?!」

ユーリの詰問に、男たちは戸惑っている。

「もうダメだ……、国から指名手配されたらオレ達……行き場がなくなる!!」

あんな妖精、もうどうでもいいだろう?!オレはもうたくさんだ……っ!!!」

魔術師の男、ラルハルムが弱腰になって降参を促す。

「よくわかんねえけど……、全大陸指名手配の悪人にされたらオレ、母ちゃんに合わせる顔が

なくなっちまう……。」「すっかり覇気の抜けた戦士、ゲラルクが肩を落とす。

二人の士気が完全に下がったのを見て、リーダーの男、コウエンは苦虫を噛み潰した顔になる。

「ちっ……、仕方ねえ……。」

ルファに合図を送れ……、妖精をあいつらにくれてやるって……。」

コウエンがそう言うと、ラルハルムが右手に持った杖を振り上げて、

左右に2回空を書いた。

恐らくそれが合図なのだろう・・・と、ユーリは満足そうに微笑んだ・・・がフィルは不満そうだった。

だがしかし、5分待ってもそのルファという者が現れる気配がない・・・。

不審に思ったユーリは「どうということ!?」と詰め寄る。

コウエンはもう一度合図を送るように指示すると、ラルハルムがさつきと同じように空を書いた。

しかしそれでも誰かが現れる気配が一切なかった。

「まさかあいつ・・・、オレ達を裏切ったんじゃないだろうな・・・?!?」

そう勘繰ったコウエンは、ゲラルクにルファを連れてくるように命令するとドストスと走って行った。

ユーリにイライラや不満が次第に募っていく。

しばらくしてゲラルクが困った表情で戻ってきた・・・、勿論誰もつれずに・・・。

「どうだった!?」とコウエンが聞く・・・、ユーリは見ればわかるだろう!と、顔をピクピク痙攣させた。

「ルファが配置してた場所にこんなものが置いてあった・・・。」  
息を切らしながらそう言うと、コウエンに一枚のメモを渡した。

それを声に出して読むコウエン。

「お前達の勝手極まりない無秩序なやり方には嫌気がさした。

オレはオレのやり方で魔物を狩る、お前達とはここでお別れだ・・・。

それとこの妖精だが、お前達の手元にあれば殺しかねない。こいつはオレがもらっていく・・・だとお!？」

ルファという者の裏切り行為により、妖精まで奪われてしまったコウエン達。

「あのクソアマがつ!!最後の最後で裏切りやがった!!」

「どうするんだコウエン……！！妖精がいなけりゃ……っ！！」  
と、最後まで言いかけて殺気に気付く。

嫌な汗が背筋をつっーっと流れ落ちる……。  
ゆっくりと振り返ると……。そこには、もはやどこで自分達を狙っているかわからない弓使いに怯えることなく

正々堂々とぶちのめす準備が出来たユーリと、レイピアを構えたフィルの姿があった……。！！

「あの時に行った『見逃す』という言葉の意味はこういうことだったのか！？」と、フィル。

「ええ、妖精は任意で鱗粉を放つことができる上に、補助魔法を得意とする種族……。」

鱗粉で自分の居場所を示すことができるし、密接した距離ならば補助魔法で相手の人間を眠らせたり

麻痺させたりすることも可能なわけよ……。でもあいつらにそんな気配はどこにもなかった。

ということは、魔法を封じる籠か何かに入れられてる可能性が高いってわけ。

その籠を今持っていないとしたら、あたし達を遠くから狙っている弓矢使いが持つてるかもしれないってこと。

こっちが優位であることを示して、妖精を渡せば見逃すって言うて、向こうがそれに従ったなら

こっちのもんよ。

妖精を連れて来てくれるどころか、同時に見えない遠距離攻撃にビクビクすることもなくなるってね！！」

ユーリの思惑にまんまとハマられたコウエン達は、それがどうしたと言わんばかりに武器を構える。

……が。

「遅い……っ！！」

フィルが風のようにレイピアを振りかざし、武器ががちゃんっと地面に落ちる。

慌てて魔法の詠唱に入るラルハルムだが、ユーリの詠唱速度に全く敵わなかった。

ユーリは敵を麻痺させる補助魔法を唱えて、3人共金縛りにあったように地面に倒れ伏せ、ピクピクと全身を痙攣させている。

顔には、仲間に裏切られた悔しさと、ユーリにしてやられた怒りが入り混じっていた。

しばらくすると、国の兵士が住民の通報で駆けつけてユーリ達に武器を構える。

状況を説明したユーリは、そのまま鷹派の連中を兵士に引き渡して報奨金をもらった。

「・・・つて、え？・・・報奨金？」ファイルがユーリを凝視する。

「言ったでしょ？妖精の村を襲撃した時点で彼らは犯罪者になったつて。」

犯罪者は即刻ブラックリストに載せられて懸賞金がかけられるんだけど、今回はリストが作られる前に

捕縛できたから、その報奨金・・・。」

もらって当然という悠然とした態度で、ユーリは言い放つ。

「まさかこれも計算ずく・・・つてワケじゃないだろうな・・・！？」

「妖精を取り戻せなかったんだから、計算通りつてわけにはいかなかったわね・・・。」

そう愚痴ると、ユーリはこれからどうしたものかと頭を悩ませた・・・。

すると、野次馬の人混みの中から酒場のマスターがこちらに視線を送るのが見えた。

ユーリは含んだ表情を見ると、マスターに従って歩いて行った。

「ラルヴァへ向かったって!？」

酒場の奥の一室で、酒場のマスターはユーリ達に情報を流した。

「はい、赤髪のショートヘアをしたルフアと呼ばれていた弓矢使い……。」

魔物に深い憎しみを持って鷹派に加わったようです、彼女がカウンターで飲んでいた際、うわ言のように

『ラルヴァ』と、何度も呟いていました……。

それ以上は……、うわ言だったのでハッキリとは聞き取れませんでした……。」

ひそひそと、まるで誰にも聞かれないようにしているマスターの態度は明らかにおかしかった。

「なぜそのことをオレ達に教える……!?何か企んでいるのか!？」

「いえ……滅相もない!!私はただ……お二人の旅の手助けになれるならと……!!!」

手を左右に振って、慌てて否定する姿がますますもって怪しかった。しかしユーリはすでに、マスターの本心を見抜いていた。

「わかったわ、その情報料として……、あなたが鷹派をかくまっていたこと……兵士達には黙っていてあげる。」

そう言うと、「さすが『黒髪の君』は話ができる」とおだてて今日の酒代はおごりだと言い残すとカウンターへと戻って行った。

「なんか腑に落ちん……!」と、歯がゆそうにするフィルに対し……。

「世の中ってのはこういうモンよ、自分だけがかわいいの!」と言って、ルートヴィアを一気に飲み干す。

「さ、妖精の娘とやらを取り戻す為にラルヴァへ急ぐわよっ!!」

「……なんか、こんなやる気満々なユーリは初めて見た気がするな……。」と、フィルがぼやく。

「な〜に言ってるの!？」

あたしはいつだってやる気満々よ!？」  
勢いよく立ちあがり、ユーリ達は次の町へと目指すことになった。

鷹派の連中を裏切ったルフアという人物についての情報はあまり多くないが、一応は揃っている。

赤髪、弓使い、魔物を心底憎んでいる、そして妖精を連れてラルヴァへ向かっているということ。

ザピスで得た収入で、更に旅に必要な備品や食糧を買い込むと、ユーリ達は早々とザピスの町を  
後にした……。



## 第2章 「妖精狩りと魔物嫌い・後編」(後書き)

ようやく鷹派との決着がつかしました。

妖精は取り戻せませんでした。……ユーリの過去がほんの少し明かされた今回。これからも出来るだけ読者の方にわかりやすくできるように執筆頑張ります……!!

### 第3章 「盗賊ギルドとひよっこシーフ・前編」

ここはセアシエル大陸・・・、この大きな大陸には4つの大国が存在する。

今もなお神話の息吹きを感じさせるこの世界では、妖精や伝説上の魔物が実際に存在しているのだ。

だがしかし他と違うところ・・・、それは魔物に人間のような感情を持つ知性をもったものが現れたということだろう。

ほんの少し前ならば魔物といえば人間に害を為すだけの危険な存在であったが、近年では魔物の中にも自然の摂理の元に生態系に

深く関わりを持った重要性を持つものがいると判明したのである。それに伴って、この大陸にはそんな魔物を保護するという団体が組織された。

人間に危害を加えない限り、その存在を守り救済・保護する団体・・・それがモンスターズ・ボランティアという組織である。

それを作ったのはまだ若干14歳の少女・・・。

黒髪、黒目で肌は象牙のように真っ白で、か細い体には宮廷魔術師すら凌ぐ魔力を秘めていた。

ほぼ全ての魔法を習得し、その知識も人並み外れている。

『黒髪の君』という異名を持つその少女の評判はすこぶる悪く、ある時は『黒い悪魔』、またある時は『銭ゲバ』、『混沌の申し子』、『金の亡者』などなど、実に様々な二つ名を・・・。

「ちょっと待ちなさいよっ!!」

世界観説明から何いつの間に他人の悪口に転換されてんのよっ!

!しかも全部あたしの悪口じゃない!!」

「ユーリ・・・、頼むからプロローグに文句を言うのはやめてくれ

・・・」

文句を言った少女、この少女こそ冒頭で説明した銭ゲ．．．いや、この物語の主人公であるユーリ・エルロンその人だ。

そしてそんなユーリへのツッコミ担当である青年こそ、ユーリの下僕第一号にして純血のエルフのフィレミアム・カルテットである。

「ちょっと待て!!」

誰が下僕第一号だっ!!しかも別にツッコミを担当した覚えなど一度もないぞっ!!」

「だからもうやめなつてば．．．、話が進まないじゃん。」

そんな二人は今、ある使命を抱いてこのラルヴァという町に辿り着いた。

前回二人は偶然にも妖精の村が襲撃される場面に出くわして、そこで唯一妖精でたった一人の生存者だった男の頼みを聞き入れたのである。

妖精が死ぬ間際に告げたこと．．．、それは村を襲撃した犯人が連れ去った娘を救い出して欲しいという最期の頼みだった。

ユーリ達はその言葉を聞き入れて、彼らを埋葬すると．．．すぐさま妖精の娘を追った。

村を襲撃した犯人を取り押さえることには成功したが、肝心の娘だけは．．．犯人達を裏切ったルフアという名の女性が連れ去った後だったのだ。

二人はルフアを追うべく、確かな情報を元にこのラルヴァへと到着したのである。

ラルヴァ．．．、そこは各国を行き来する街道の中心に位置する町であり数々の冒険者や行商人、観光者などが必ず立ち寄ると言われる流通の拠点となっている場所となっている。

様々な店が軒を連ねて立ち並ぶ中、冒険者ギルド、盗賊ギルドなど・  
・人の数が多い程、それだけ怪しい店やギルドが存在する。  
ユーリは、ひとまず盗賊ギルドに顔を出すことにした。

「おい・・・、一般人が盗賊ギルドに入れるわけがないだろう!？」

フィルの心配を他所に、ユーリは相変わらずの不敵な笑みを浮かべて豪語する。

「ふっ・・・、このあたしを誰だと思ってるの!？」

どこからそんな自信が出てくるのか・・・、フィルは「そんなの知らん」という顔でユーリの言葉をスルーした。

盗賊ギルド・・・、名前からして盗賊団の巣窟と思われるが盗賊ギルドだけは正式に国から認められた組織なのだ。

国から依頼が来ることも多く、その活動は主に探索から発掘と・・・内容は様々である。

特殊な技能を有し、その技術面の高さから冒険者ギルドとはまた違った信頼度を持っている。

しかし危険で極秘とされる任務が多い為、その守秘義務は相当堅く一般人にはギルドに入るところか見つけることすら困難だ。

ユーリは町に到着するや否や、いきなり人気の少ない通りへとどんどん入って行く。

盗賊ギルドという位なのだから、やはり人目につきにくい場所にあるのだろうかとフィルは推測した。

次第に道端に倒れている酔っ払いや、野良猫がうろつくだけの通りに出て・・・ユーリは回りの建物に気を配って歩く。

ここは大通りにある歓楽街の裏道になっていた、そしてユーリはこの町で一番大きなカジノの裏口で足を止める。

「ユーリ、ここはカジノだぞ!？」  
カジノに用があるんだったら、なぜ正面から入らないんだ。」

ユーリは回りに誰もいないことを確認してから、フィルに耳打ちするような小声で教えてやった。

「フィルってばさあ、結構世間知らずだったりする!？」

ヤバイもん程、目立つところに隠すモンなのよ!! 盗賊ギルドに侵入したがる連中や、犯罪の依頼をしたがる連中は

たくさんいるからね、そんなやつらから身を隠す為に盗賊ギルドはあちこちに拠点を移動させるのよ。」

「つまり……、今盗賊ギルドが拠点としている場所がこのカジノというわけなのか!？」

そんな情報、どこで得るんだ……。」

呆れた顔で、フィルが聞く。

「これも他言無用だかんね!？」

昔盗賊ギルドに恩を売ったことがあってね、VIP扱いを受けてんのよ。

だから拠点が変更される毎に、逐一あたしのところまで情報が流れるような仕組みにしてもらってんの。

あ……、その方法はさすがに教えられないから。」

「……別に知りたくもない。」

つくづくこの女は何でもアリだな……と、フィルは呆れた顔のままユーリについて行く。

裏口のドアを3回、1回、3回というリズムでノックすると、ドア

に付いている細長い覗き窓が開いてそこから男の両目が現れて  
ユーリの姿を確認する。

「何の用だ!？」

ドスの聞いた声で、質問される。

ユーリは慣れているのか、元々怖いもの知らずなのか、全く臆せず  
堂々とぺったんこの胸を張りながら答える。

「ピザの配達に来ました〜〜!!」

・・・フィルは倒れるように、前のめりに突っ伏した。  
するとドアが開き、男がユーリを迎え入れるように招いた。

ユーリはそのまま何事もなかったかのように建物の中へ入って行く、  
倒れこんだままのフィルの姿に不審な眼差しを向けた男がユーリに  
向き直って指をさす。

「あ、それは大丈夫!あたしの連れだから。」

『それ』・・・って!!

しかしそんなフィルに、もはやツツコミを入れる気力が残っていない  
いせいか、よろよると起き上がると力が抜けた状態のまま男の前を  
通り過ぎて行く。

中へ入って行くと、そこは厨房になっていてコックさん達がものす  
ごい勢いで料理を作っている真っ最中だった。

どこからどう見てもただの厨房・・・、どこにも盗賊ギルドを思わ  
せるようなものは何ひとつない。

疑いの眼差しのままユーリに黙ってついていく・・・、しかしそれ  
よりも一番気になるのはフィルの後ろをさっきの大男がいかつい  
視線を向けたまま一緒に来ることだった。

フィルはちらちらと後ろを気にしながら、なぜだか肩身の狭い思いをしながら歩いて行く。  
厨房から更に裏手の方へ進んで行くと狭い通路を進んで行き、倉庫のような所に出てくる。

「ユーリさん、少々お待ちを。」

低い声でそう言うと、男は倉庫の中にある木箱やら荷物やらをどかしていく。

一体何をしているのかフィルが黙って見ていたら、ユーリが退屈そうに説明した。

「この倉庫に地下へ続く階段が隠されてんのよ。」

ほら……、長い間使われていないように見える倉庫なのに荷物をどかしても埃ひとつたないでしょ!?

客やギルドメンバーが来る度にこうやって移動を繰り返しているからね。

見た感じただの倉庫を装っていないと、侵入者を騙せないからこうゆう仕組みにしてるんだけど……。

ねえ、埃くらいは仕込んだ方がいいんじゃないかしら!?

勘の鋭いやつだと、この部屋が定期的に整備されてるって気付かれるから、この方法見直した方がいいわよ!?

荷物をどかしながら、男が素直に返事をした。

外見上は力自慢の大男に見えるのに、やけに態度は従順なやつだと……フィルが男に対して情けない……と思った。

しかしその理由は、この後すぐに理解することになる。

大男が荷物をどかし終えて、ユーリ達に向かって一言「どうぞ」と言って道を譲る。

「御苦労さん。」

ユーリはそう言って、現れた地下へと続く階段を下りて行った。ファイルもその後をついていく、こつこつと中へ進んで行くと次第にランプの灯りで明るくなっていき・・・中の様子が分かって来る。そこは何かの事務所のようになっていて、机には秘書らしき女性が笑顔で出迎える。回りにには装飾品や、発掘で見つけた宝物なのか・・・色んなものが飾られていた。

「これはユーリ様、今回はどういったご用件で？」

メガネをかけた美人秘書がユーリに会釈すると、用件を聞いてきた。

「悪いけどギルド長にアポ取ってくれないかしら？」

しばらくこの町に滞在するけど、出来るだけ早くにお願いするわ。

「

そう告げると秘書は眉根を寄せて、ギルド長のスケジュールが書かれていると思われる手帳を素早くめくって調べる。

1分も経たない内に秘書はアポを取り付けた。

「では、今から12分後に面会出来るように手配いたします。

それまで・・・ユーリ様さえよろしければ、こちらでのご自由におくつろぎください。

それでは私は失礼いたします。」

そう言って深々と頭を下げると、奥の扉の向こうへと消えて行った。ユーリは部屋の隅にあったソファに座って、言われた通りにくつろぎます。

「ユーリ・・・、ギルド長とはそんな簡単に面会出来るもんなのか！？」

ソファの背もたれに思いきりもたれながら、ユーリは殆どのけぞる形でファイルの続け様の質問に答える。

「普通なら早くて一週間後とかになるわね〜」。

しかも予約も取らず突然の訪問の場合だと・・・、20日から一か月はザラなんじゃない!？」

「お前・・・、どんだけの恩を売ってるんだ・・・。」

なんだか頭が痛くなってきた。

ユーリのこういふところを見て、つくづく思う。

自分について行く人間を間違えたかもしれないと・・・。

適当にソファで時間を潰していた二人だが、12分という時間はあつという間に過ぎていた。

奥の方からこてこての成金趣味のような固太りの男が、どしどしと足音を立てながらこちらに向かってくる。

そんな男に向かってユーリは片手を振って挨拶する・・・、ものすごく適当に。

しかし成金男はそんな態度など全く気にしていない様子で、ユーリの姿を確認するなりニカツと金歯を見せて微笑んだ。

「おお、本当にユーリじゃねえか！随分久しぶりなんじゃねえのか！？」

3年前のリヴァヴィウス鉱石発掘以来か・・・、あん時はお前の魔術と知識とハツタリに助けられたもんだ。

ん・・・？

なんだ・・・、お前も遂に男をはべらせるようになったのか・・・！？」

葉巻を吹かしながらフィルの存在に気付くギルドマスターに、ユーリは満面の笑みを浮かべながら気さくに全面否定した。  
ソファから立ち上がると、ユーリは早速本題に入る。

「そんなことよりさ、ギルドマスターに依頼があつて来たんだけど聞いてくれる？」

葉巻を肺活量最大で吸い込むと、そのままユーリがいる方向とは正反対の方に顔を向けて思い切り吐き出すと再び笑顔になる。

「お前の方から頼み言なんて珍しいじゃねえか・・・、今度は一体どんな問題抱えてやがるんだ？」

ユーリは件の精霊襲撃事件くだんについて、かいつまんで説明した。  
というのも、ギルドマスター程の人間ならばその程度の情報は既に耳に入っているものだろうと見透かしてのことだった。

案の定事件に関して殆ど知り尽くしている様子だった為、話は早い。

「・・・で、そのルファつて女の居所が知りたいってわけだな？  
さつき闇オークションのリストを調べてみたが、妖精の娘っていう商品はなかったな・・・。」

だとしたらその妖精をまだ手元に持っているか・・・、あるいは既に殺して捨てているかのどっちか・・・だが。」

ユーリは手で口元を押さえながら考え込むと、後者の可能性を否定した。

「多分手元にまだ持っている可能性の方が高いわね……。  
もし最初から殺すつもりでいたのなら、大きな危険を冒してまで  
妖精を連れて逃亡するなんて考えにくいわ。」

「殺すつもりがないか……、何か特別な恨みを持っているのか……」

「わかった、とにかく闇オークションの方には新たに商品が入荷されて  
いないか随時チェックしておく。」

「お前達は今日のところは宿に泊まって、男に扮装した赤い髪の  
ハンターなら相当目立つからな。」

部下にこの町を徹底的に洗わせる、この町から出て行く人間も厳  
重に見張っておくから安心しておけ。」

面会時間終了なのか、ギルドマスターはそれだけ言うと言を返して  
奥の方に帰ろうとしていた。

ユーリはまだ用事があるのか、ギルドマスターを呼び止めるとある  
人物の紹介を依頼する。

「あ……っ、ねえ!!!」

「探し物ならシルヴァ・アトラスに依頼するのが早いと思うんだけ  
どさ……、彼って今いないの!?!」

シルヴァ・アトラスという名を耳にした途端、ギルドマスターの表  
情が曇る。

大きく溜め息をつく、振り向き様に一言漏らしたただけだった。

「……奴なら消えた。」

「今まで派手に仕事をやらかしてきたからな、今じゃすっかり賞金  
首にされちまって逃亡中だよ。」

奴の所在を掴もうにも・・・シルヴァは盗賊ギルドの中でも最高の盗賊だ、見つけるのは至難の業だろうなあ。

そのルファって女を見つけないよりも骨が折れるさ、・・・だからシルヴァのことは諦めな。」

伸ばした手をがっくりと落とすと、ユーリはすぐに諦めた様子だった。

そのままユーリも踵を返して盗賊ギルドの事務所から出て行くとした、・・・その時だった。

「じゃんじゃかじゃん、じゃんじゃ〜じゃん、じゃんじゃかじゃんじゃーん・・・。」

どこからか奇妙な歌が聞こえてくる・・・。

とても胡散臭く、怪しさ満開で、どこか気が抜けるような・・・そんな間抜けな歌が。

フィルは辺りを見回すが気配を完全に消しているせい、自分達以外の存在を見つけれないでいた。

「なんだ・・・、どこから聞こえるっ!？」

きよろきよろと律儀にも歌声の主を探そうとするフィルに対し、ユーリは呆れた表情でその行動を遮った。

「やめときなさいよフィル、今の歌声聞いたでしょ？」

馬鹿のすることにはいちいち構っていたら人生無駄にするわよ、ほら・・・さつさと宿に行つてチェックインして来る!!」

「オレの役目っ!?!？」

「お〜〜い、せつかくの登場シーンを無視しないでもらえるかな  
マドモアゼ〜〜ルっ!？」

若い男の声が聞こえて、ギルドマスターは呆れた顔で声を荒らげた。

「その声はラークか!

ふざけてないでさっさと仕事に行って来い!」

ギルドマスターの怒声にラークという男は観念したのか、事務所の天井にぶら下がっている大きなシャンデリアから飛び降りて来て見事な着地を披露した。

金髪のおさげに真っ赤なバンドナ、緑を基調としたラフな格好をしており腰にはダガーを2本装備している。

顔は幼く、まだ15歳かそこらであろう。

ラークという少年はにっこりと紳士的な笑みを浮かべながらユーリの目の前にひざまずき、右手を取ってそっとキスした。

そんな挨拶のされ方に慣れていないせいか、ユーリはキスされた途端に全身に走った寒気で顔が引きつっている。

ゆっくりと立ち上がると、ラークは頼んでもいないのに何の前触れもなく勝手に自己紹介をしてきた。

「初めまして美しいレディ、オレの名前はラーク。

この盗賊ギルドの期待の新人として名を馳せる予定の、そんな凄腕シーフなんだぜ・・・!？」

君さえ良ければこのジェントルマン・シーフなオレが・・・、君の願いを叶えてあげても・・・。」

「パスっ!！」

すぐさましゃ・・・と片手を上げて断りの合図を送ると、ユーリ

はそのまま素早く踵を返して出て行く姿勢を取った。

思ってもいない態度を取られて慌てるラークは、ユーリを追いかけようと手を伸ばしかけるが・・・その手は残念にもギルドマスターにつかまってしまう。

びくつと振り向いたラークの目には、ひくひくと恥をかかされた顔のギルドマスターが映っていた。

「ラーク・・・、お前はウチの上客相手にフザけたことしてんじやねえ!!!」

「さつさとメルズ遺跡に行ってお宝でも探して来いって言ってんだ!!!」

だがしかし、ラークは意地になって命令に背くような・・・反抗的な眼差しに変わると真っ向から反発した。

「おやつさん!!!」

オレはあのシルヴァ・アトラスの息子なんだ、そんなケチな盗賊に成り下がるのなんてまっぴらごめんなんだよ!!!

一流のシーフは遺跡を荒らしたりなんかしない・・・、依頼人の願いを叶える為にどんな難題にも立ち向かって行くもんなんだ!

オレは・・・そんな親父みたいな・・・、立派なシーフになりたんだよ!!!」

「ばつつかもーん!!!」

ギルドマスターの喝が飛んだかと思ったら、大きな宝石のあしらわれた指輪をたくさんはめている手で思い切りゲンコツされた。

腕の力による威力よりも、硬い宝石が見事頭を直撃してブシャーッと大量に出血する。

脳天に食らった衝撃によりその場に突っ伏して・・・目の前に立ち

はだかるギルドマスターを、貧血状態のラークが見上げる。

「お……っ、おやつさん……!?!」

「ラーク……、シーフってモンはな……。」

結局のところは単なる盗賊でしかねんだよ、上も下もありやしねえ……。

お前の親父だってな……その仕事ぶりが目立ち過ぎて、敵をたたくさん作つちまった結果……こんなことになったんだよ。

わからねえのか……!?!?

盗賊つてもんはそれだけ危険な仕事を生業としてるんだ……、お前みたいなひよっこがシーフのなんたるかを語ってんじゃねえ!

ワシは逃亡する前のシルヴァからお前のことを任された……、だからワシにはお前を立派に育てる義務があんだよ。

お前がシーフになりたいって言うからこのギルドに入れてやった……、だがそれはお前を死地に送る為なんかじゃねえ!!!

しっかり下積みして……シーフとしての力を十分に育成する為だ、その為にお前には簡単な任務からこなすように言っている。

……悪いことは言わん、ユーリの依頼だけは死んでも受けるな

!?!」

「ちよっと……、断ってるのはこっちなんだけど!?!」

背後で実にクサイ小芝居が繰り広げられているのはわかっていたが、どうしても聞き捨てならない台詞が耳に入ってしまった。思わず

うんうんと感慨深く頷くファイルはともかく、ユーリはすっかり気分を害された。

「まあ……あたしが世間でどう言われているのかなんて今更追及す

る気はさらさらないんだけどさ、そこまで言われちゃさすがのあたしでも黙ってらんないわ。

今は特に命の危険に関わるような展開には陥っていないから、そこにいるひよっこシーフ……。

このあたしが使ってやるうじゃない、……勿論正式な依頼ってわけじゃないからノーギャラになるけど構わないかしら？」

ユーリの申し出にラークの瞳はキラキラと輝いているが、ユーリの後ろでファイルが慌てて……沈黙したまま首を大きく左右に振って注意を促していた。

願ってもない展開にラークは、頭からドクドクと流血したまま立ち上がってギルドマスターの許可を求める。

「おやつさん、いいだろっ!？」

メルズ遺跡の探索は単なる新米シーフの試練っただけだから、時間的に急いでるわけじゃないし。

彼女にオレの実力を認めさせることが出来れば、おやつさんも認めてくれるんだろ!？」

ギルドマスターの表情は困惑していた、無理もない……。

眉間にシワを寄せながら考え込むが事務所の奥の方から、次の予定が迫っていることを知らせに来た美人秘書が現れて遂に考える時間がなくなってしまった。

「……ワシはこれから談合に行かねばならん。

そうだな……、可愛い子には旅をさせるとも言うし……。

わかったわかった好きにしる!

ただしユーリ……、ラークはまだガキなんだ……命の保証はしてくれるんだろっな!？」

にっこりと嘘笑いを浮かべると、ユーリは左手の親指を突き立てて了解サインを送った。

「いまいち信用に欠ける・・・というような疑わしい顔になりながらも、美人秘書に促されるままギルドマスターは了解せざるを得なかった。」

「それじゃラークよ、せいぜい頑張れよ。」

「お前が納得するまで旅をしたら・・・いつでも戻って来い、だが戻って来るにはメルズ遺跡のお宝を持って来てからだ。」

「それじゃあな。」

「・・・ありがとう、おやつさん!!」

深く深くギルドマスターに頭を下げると、額をつたっていた出血が床にばたばたあーっと滴り落ちて行った。

美人秘書に連れられ、ギルドマスターは誰にも聞こえない程度の小声で・・・独り言を呟いた。

「・・・若い内の苦労は金を出してでもしろって言うが、どうやら金をはたかなくても殺人的苦労を体験できそうだな・・・。」

「・・・?」

うつすらと美人秘書の耳に届いたようだが、余計なことを口にしないのが有能な秘書だった。

事務所のホールから姿が見えなくなって・・・遂に3人だけが残されてしまう。

ラークは出血多量で足元がフラついていたが自覚がないのか、へらへらと能天気な笑みを浮かべながらユーリに礼を言った。

「ありがとう美しい人、君のおかげでこの辛気臭いギルドからほんの少しだけ解放されたよ！」

でも今言ったことは本当のことだからね、オレは立派なシーフになる為に全力投球で頑張るからさ!!」

そう言っただけ握手を求めたが、差し出された手を白い目で見つめながら・・・ユーリは握手に応じないまま事務所を出ようとする。

「マーク・・・だっけ？」

自主的にあたしの所に来た勇氣だけは褒めてあげるけど、勘違いしないでよね。

あなたは丁稚奉公ていぢちほうこうとしてあたしの元に来たことになってるんだから、『仲間』とは少し扱いが違うのよ？」

展開の流れに戸惑ったマークは、頭の中に？マークがたくさん浮かんでいた。

「・・・え、あれ？そうだっけ・・・？」

確か君の方がオレを仲間に入れてくれるって話じゃなかった・・・？」

くるっと勢いよく振り向いたユーリは、びしっ指を差して思い切り訂正した。

「ちっがあーう!!」

あたしはあんたを仲間にするなんて一言も言ってないわよ!?

あたしはあんたを使ってやるって言ったの、しかもノーギャラで!! オツケー？

つまりあんたはこのファイルに続く下僕第2号になったってことなのよ、おわかりかしら？」

どくどくと・・・、頭の出血がラークの思考を鈍らせる。  
不憫に思ったフィルがラークの肩を優しくぼんっと叩いて、憐れに満ちた表情で現状を説明してやった。

「お前はまんまとユーリにはめられたんだよ・・・。」

確かさつき・・・、盗賊ギルドの中で一流のシーフと言われたシルヴァ何とかってヤツの息子だって言ってたよな・・・!?

お前はそこに目を付けられてしまったんだ、しかもノーギャラで。

「

笑顔がひきつる・・・。」

勿論、出血多量のせいだけではない・・・。」

「さあ～～、妖精を取り戻したらしばらくの間は資金稼ぎの為に遺跡を荒らしまくるわよ～～!」

ゴーサインを元気よく発したユーリとは裏腹に、ラークはそのまま出血多量でぶっ倒れてしまった。

だからやめとけって言ったのに・・・という表情でフィルは、倒れたラークを伏し目がちに見下ろしている。

親父・・・、オレ・・・、立派なシー・・・フに・・・っ!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5227g/>

---

MOLOCH ~ ボランティア編 ~

2011年10月5日21時16分発行